

# TOTO

2018年 新春号

Toward a Creative  
Architectural  
Scene

# 通信

特集

Special Feature  
Even architects renovate  
their homes

建築家の  
自邸も、  
リノベーション





Case Study

4

Nagayama Yuko

photo by Yamauchi Norihito

Case Study

5

Tanijiri Makoto

photo by Kuwata Mizuho

Case Study

6

Aoki Shigeru

photo by Kawabe Akinobu

住宅のストックが5,000万戸を超えるといわれ、人口も減少している日本では、建築家の仕事として改修が増え、注目されつづけている。そのようななか、建築家の自邸も、リノベーションによるものが散見されるようになってきた。建築家にとって自邸は、自身の建築思想を色濃く反映させることができるチャンスであり、時には代表作として建築史上に残る名作にもなる。その自邸も、新築ではなく、リノベーション作品に。まさに現代らしい、ひとつの潮流なのではないか。

設計／團野浩太郎+團野沙知子	4
設計／井原正揮+井原佳代	12
設計／浅子佳英	18
設計／永山祐子	26
設計／谷尻 誠	32
設計／青木 茂	38

シリーズ	
旅のバスルーム103	文・スケッチ／浦 一也 マウント・ネルソン(南アフリカ・ケープタウン) 46
現代住宅併走39	文／藤森照信「八木邸」設計／藤井厚二 48
最新水まわり物語45	GINZA SIX 54
地域に生きる会社74	マツミハウジング 58
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	en[縁]:アート・オブ・ネクサス 60
	第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館帰国展
News File	TOTO News, Cera Trading News, Book 62



Case Study **1**

Danno Kotaro +  
Danno Sachiko

photo by Fujitsuka Mitsumasa

Case Study **2**

Ihara Masaki +  
Ihara Kayo

photo by Sobajima Toshihiro

Case Study **3**

Asako Yoshihide

photo by Sobajima Toshihiro

## 特集

Special Feature / Even architects renovate their homes

# 建築家の 自邸も、 リノベーション

# TOTO 通信

Toward a Creative  
Architectural Scene  
Number 517  
New Year 2018

ケーススタディ1	工場のスケールを人間のスケールへ	「白金の家」
ケーススタディ2	寝室は徒歩3分	「はなれのはなれ」
ケーススタディ3	ラフなものこそ、ラグジュアリー	「Gray」
ケーススタディ4	マンションの最上階に、天空の平屋	「杉並の家」
ケーススタディ5	鉄のフローリングに住む建築家	「広島の家」
ケーススタディ6	築40年が、まるで新築	「YS BLD.」

「TOTO通信」を  
インターネットで  
ご覧いただけます。

→ [www.toto.co.jp/tsushin/](http://www.toto.co.jp/tsushin/)

特集／建築家の自邸も、リノベーション

ケーススタディ1

# 工場のスケールを人間のスケールへ



建築家・住人／團野沙知子

日建設計に勤める團野浩太郎・沙知子夫妻は、  
築37年ほどの町工場を改修し、自邸とした。  
既存建物の壁に断熱材などを吹き付け、古い部分を、絵画技法の  
フロッターージュのように浮き彫りに。  
古いものに新しいものが響き合う、保存でも刷新でもない改修のあり方だ。

取材・文／大井隆弘 写真／藤塚光政

建築家・住人／團野浩太郎

板金の作業場だった1階土間。既存の柱や梁が工場のスケールなのに対し、新設の小柱や棚板、天板などは細く薄い人間のスケールになっている。



写真下／玄関。正面に土間、右手の階段を上ると2階広間。既存の鉄骨階段には絨毯が敷かれている。左手の壁面の左官は久住有生氏による。

写真上／1階客間から土間、玄関を見る。土間コンクリートの一部に穴をあけ、樹木を植えている。客間の欄間は、團野氏の実家からの転用。



ような感覚なのか。「白金の家」にも、通底するものがありそうだ。

## 既存建物付きで 土地を 安く購入

「白金の家」は、名前のとおり、港区白金にある。組織系設計事務所勤める建築家夫婦、團野浩太郎さんと沙知子さんが、鉄

リノベーションの設計では、既存の建物や室内を「敷地」ととらえるような感覚があるという。しかし、リノベーションの先駆者として知られる建築家カルロ・スカルパは、それとは少し異なる意識をもっていた。彼はよくこう述べたという。「レスタウロ（建築再生）とは単に昔の建物を修復するのではない。それはわれわれが、現在・未来にわたって生きるために、生まれ変わらせることである。そして、私の建築において、既存の建物が材料の一部になるのだ」。

骨造3階建ての町工場兼住宅をリノベーションしたものだ。物件探しの段階で求めたのは、新耐震基準が導入された1981年以降に建設され、かつ減価償却期間が過ぎた築30年以上の物件。土地だけの価格で建物まで手に入るからだ。運がよければ解体費が見込まれ、より価格が下がっている場合もある。ここでは、費用が浮いた分内装に力を入れられるので、新築ではなくリノベーションが選択された。

しかし、なぜ町工場なのか。團野さんに聞くと、「このあたりは町工場が多いエリアです。近所を歩いてみるとよくわかりますが、1階は工場、2階以上は住居や事務所になっている町工場をよく目にします。私たちは、家の中に地域の人々や仲間が大勢集まれる場をつくりたかったので、1階が開放的な町工場がぴったりでした」とのこと。その想定どおり、1階はポーチから直接出入りできる、ゆったりとした空間になっている。吹抜けの下には木まで植わっていて、まるで中庭にいるかのような。外壁のようにざらざらとした表情の壁が、いっ



Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

# 1

玄関脇の壁面。既存の躯体や配管などの上に、発泡ウレタン（断熱材）、石膏（不燃材）、砂状リシン（仕上材）を吹き付け、絵画技法のフロタージュのように凹凸を浮き彫りにしている。

## 新旧の要素を 同じ舞台に のせる

この壁の仕上げは、広間・台所のある2階、さらに浴室や居間のある3階へ上っても同じ。建物全体を包み込んで、その印象の基礎をなしている。よく見るとたくさん凹凸が見られるが、これは工場時代の間仕切り跡や新設した配管が浮き出たものだという。既存の内装を解体し、外壁のALC板が露出したところに、そのまま断熱材、不燃材、仕上材を順に吹き付けていった。團野さんはこの壁を、「フロタージュの壁」と呼んでいる。硬貨などの上に紙を置き、鉛筆でこすって凹凸を描き出す技法をフロタージュというが、これはその建築版だ。

新旧を問わず一緒にくたに抽象化されているので、時間という要素がはぎ取られているように見える。

抽象化の一方で、隠れた要素を露わにした部分もある。吹抜け部分で見られるディテールがそうだ。切断面がむき出しのままになっている。理由を團野さんに尋ねると、「この家は、1階から屋上まで鉄の小柱を設けていますが、ところどころにダクトコンクリートの柵板を取り付けています。金属繊維を混ぜた、薄くても高強度の材料で、よくダムなどの土木の分野で使用されるものです。この薄い板や小柱は、いわば家具スケールなので、それを既存の床や躯体に对置することで、工場のスケールを人間のスケールへと調整しようとした」とのこと。なるほど、既存の柱や梁はフロタージュで抽象化されているが、それでも工場のスケール感が残る。それをやわらげよ



写真中／2階広間の床。写真上／既存の鉄骨に取手前から、磁器質タイル、フロリング、吹抜け部分にはネット張り。写真上／既存の鉄骨に取り付けられた小柱。将来の間仕切りや柵の支えのために設けられている。



写真下／吹抜け。既存の梁に対し、ダクトコンクリートの柵床や小柱の薄さや細さが際立つ。



うとしたことこの象徴が、この切断面だ。これに加えて、対比の手法も頻繁に見られる。たとえば鉄の階段。ここには、隙間をあけて群青色の絨毯が敷かれている。既存の鉄階段には青緑色の塗装。同系色でまとめられ、材料がもつ質感がいつそう対比される。新しく設けた2階の床もそうだ。

台所から広間、吹抜けにかけて、タイル、木、網と異なる材料が続き、硬さとやわらかさ、冷たさと温かさといった性質が比較される。壁と床のあいだに溝をとったり、床を反らせたりの素材ごとの独立性の高さが、これをますます強調しているようだ。抽象化、対置、そして対比。町工場には、フロタージュをはじめとして、さまざまな手法が試みられている。しかし、その目的は一貫している。町工場から選り出した既存の要素、新しく設けた要素を同じ舞台にあげ、比較しやすい状態にする、という目的だ。だからきっと、その舞台から聞こえてくるのは新旧の対話ではない。これからをともに生きるもの同士の合唱だ。スカルバが言う既存の要素が「材料」になるという感覚は、そうした新旧の合唱から生み出されるのではないか。「白金の家」が奏でる音も、また心地よく感じた。

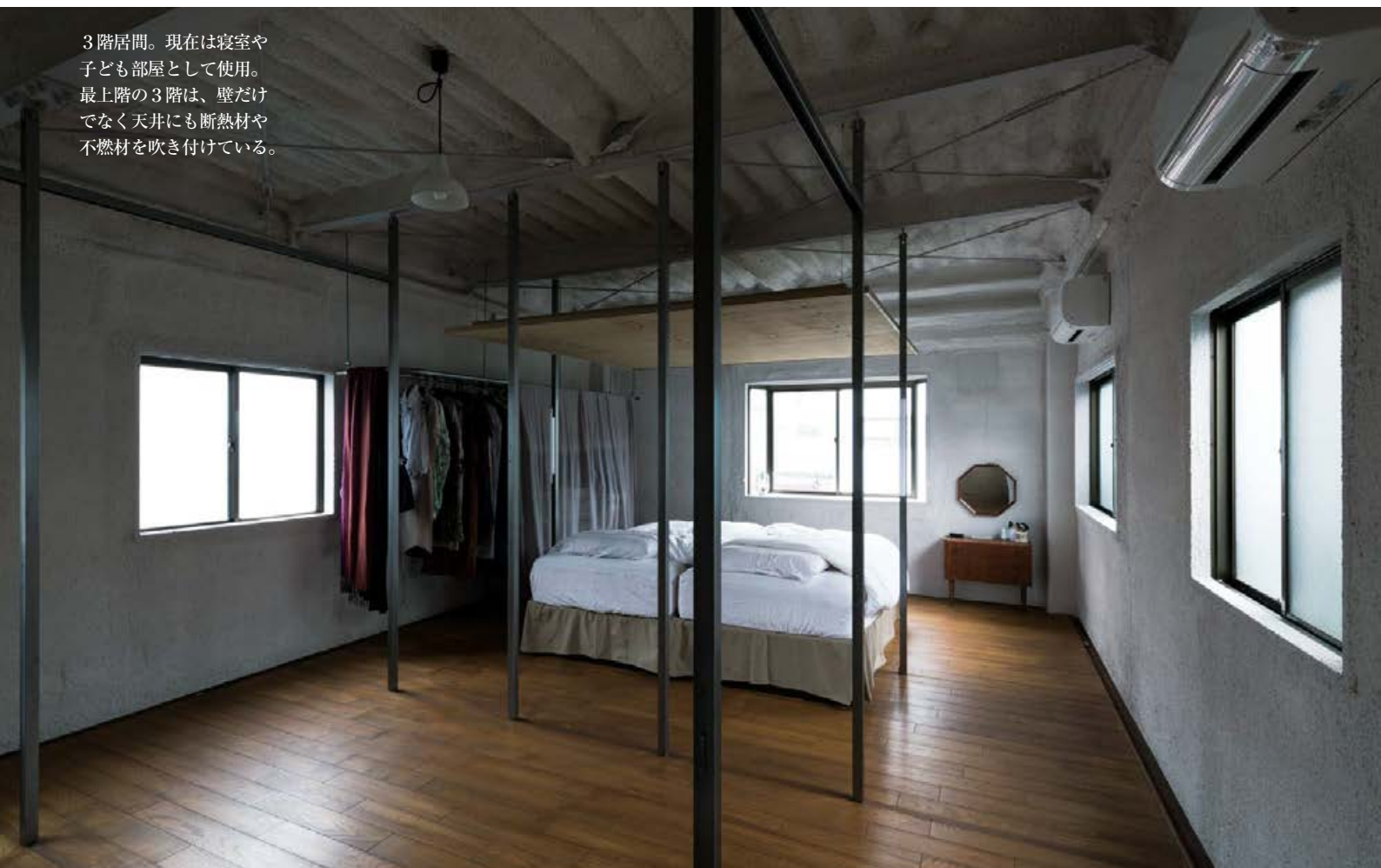
Special Feature  
Even architects  
renovate  
their homes  
Case Study

# 1





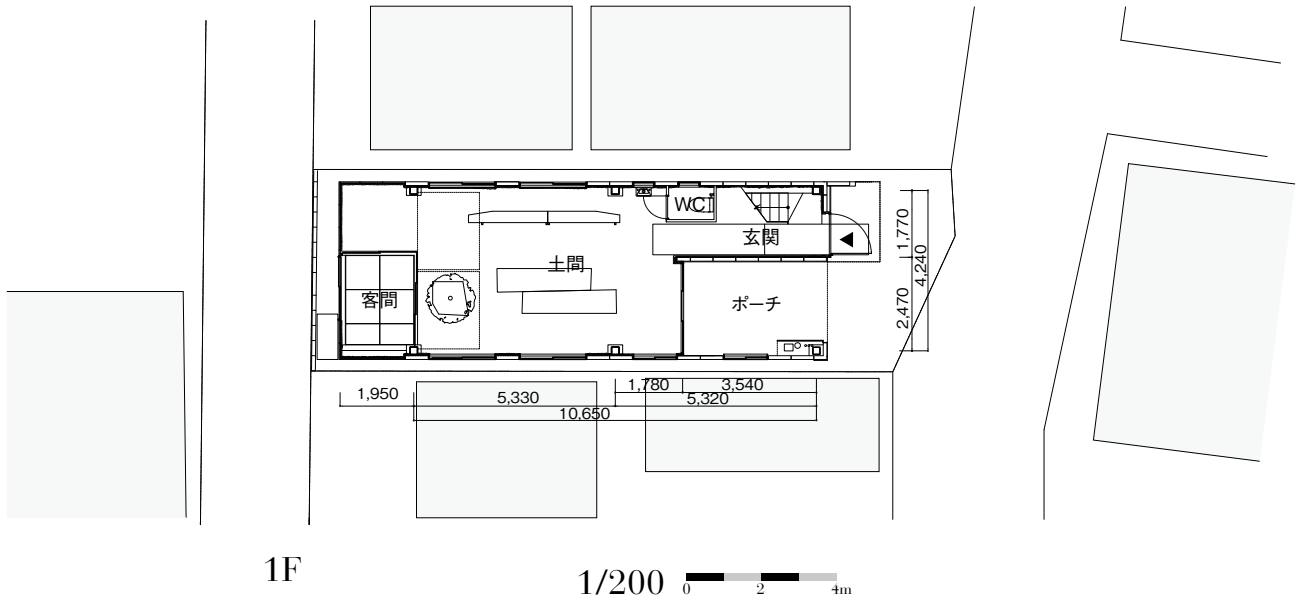
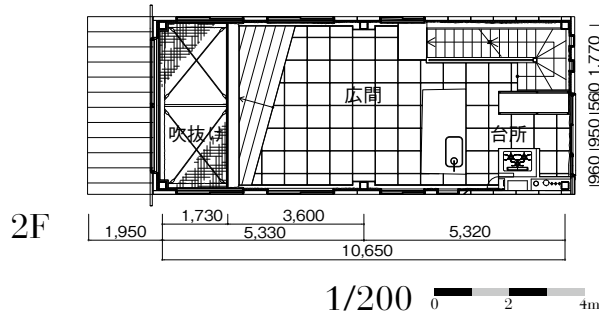
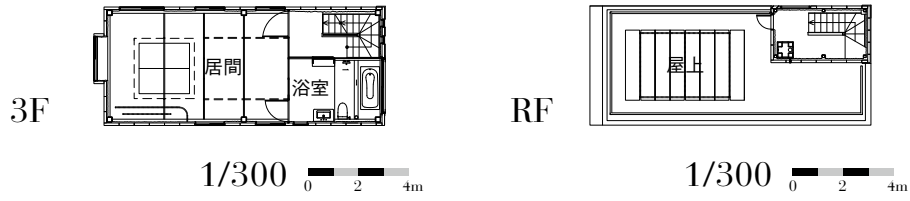
3階居間。現在は寝室や子ども部屋として使用。最上階の3階は、壁だけでなく天井にも断熱材や不燃材を吹き付けている。



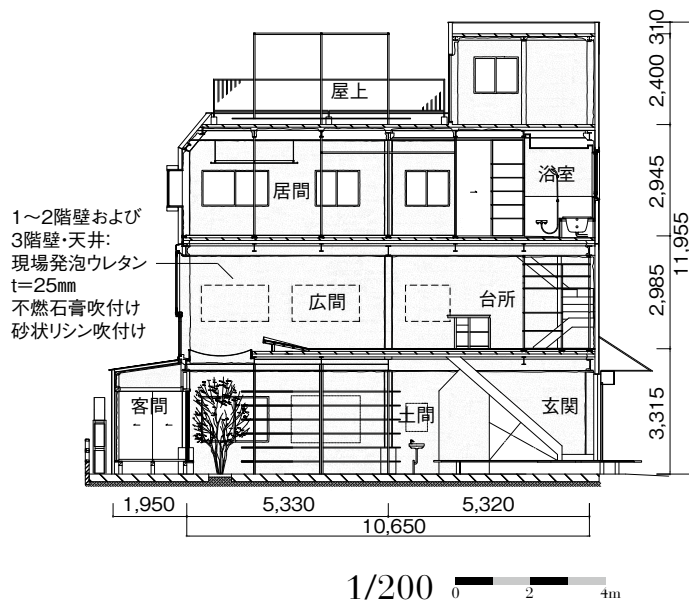
写真右/2階広間。東側の大きな開口部からの光が、吹抜けや白い壁をとおして、1階や2階全体に広がっている。右手の南側の窓は、隣の住宅が近いので、ふさがれている。左/2階広間、台所。広間には、床暖房が設けられている。



## 改修後の平面図



## 改修後の断面図





北西側から見た外観。ほとんどが既存のまま。

## 「白金の家」

建築概要	
所在地	東京都港区白金5丁目
主要用途	住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	團野浩太郎+團野沙知子
構造	鉄骨造
施工	月造
表札サイン	ONO BRAND DESIGN
階数	地上3階+塔屋
敷地面積	83.41㎡
建築面積	63.67㎡
延床面積	160㎡
設計期間	2016年4月～11月
工事期間	2016年12月～2017年3月
おもな外部仕上げ	
屋根	塗膜防水露出(既存まま)
外壁	ALCに吹付け塗装、 一部ALCのうえ タイル張り仕上げ(既存まま)
開口部	アルミサッシ(一部新設)
おもな内部仕上げ	
<b>1階</b>	
床	土間コンクリート上防塵塗装
壁	現場発泡ウレタン t=25mm 不燃石膏吹付け 砂状リシン吹付け
天井	既存躯体塗装、一部現しまま
<b>2階</b>	
床	磁器質タイル仕上げ、 一部フローリング、吹抜け部ネット張り
壁	現場発泡ウレタン t=25mm 不燃石膏吹付け 砂状リシン吹付け
天井	既存躯体塗装
<b>3階</b>	
床	フローリング、FRP防水(洗面・風呂場)
壁・天井	現場発泡ウレタン t=25mm 不燃石膏吹付け 砂状リシン吹付け
改修工事費	
建築	20,000,000円
空調	1,700,000円
衛生	1,200,000円
電気	1,600,000円
総工費	24,500,000円

Danno Kotaro

### 團野浩太郎

だんの・こうたろう／1982年愛知県生まれ。2005年早稲田大学工学部建築学科卒業。07年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。07年日建設計入社。07年TKC(トウキョウ建築コレクション)設立。明治大学非常勤講師。おもな担当作品=「立教大学新座キャンパス8号館・4号館増築棟」(11)、「東亜道路工業本社ビル」(15)など。



Danno Sachiko

### 團野沙知子

だんの・さちこ／1983年兵庫県生まれ。2006年早稲田大学工学部建築学科卒業。08年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。08年日建設計入社。おもな担当作品=「香港のオフィスビル」(17)など。

## 改修前

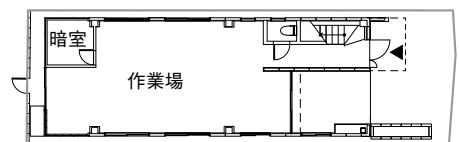
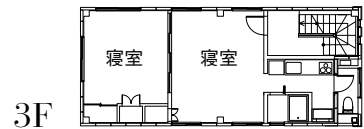
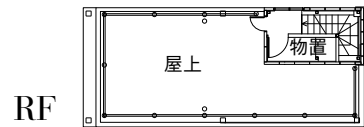
1階。板金の作業場だったスペース。機械などが置かれていた。2階、3階は住宅として用いられていた。



提供/團野浩太郎+團野沙知子

## 改修前の平面図

0 2 4m



N 1/300

特集 / 建築家の自邸も、リノベーション

ケーススタディ2

# 寝室は徒歩3分

4階建てのビルの一角にある、間口3m、奥行き9mほどの駐車場を改修した、井原夫妻の居間兼事務所。

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

2

建築家の井原正揮・佳代夫妻は、  
築38年の実家の駐車場を「居間兼事務所」として改修。  
そして、その近隣に立つワンルームマンションを、「寝室」として借りている。  
さらに、そのあいだの公道を「外廊下」に。  
都市空間をも住宅に見立てた、既成概念にとらわれない暮らし方だ。

取材・文／橋本 純 写真／傍島利浩

住人／井原 橘

建築家・住人／井原正揮

建築家・住人／井原佳代

居間兼事務所の全景。寝室は近くのワンルームマンションにあり、お互いが、それぞれの「はなれ」という関係にある。



キッチンや冷蔵庫、収納などが並べられた隣地側の壁面。奥にDSやPSも設けられている。

「はなれのはなれ」とは、建築家の井原正揮さんと佳代さん夫妻の自宅兼事務所である。この家が目を引くのは、まず、築38年の鉄筋コンクリート造4階建ての建物のビルトインガレージをリノベーションして自宅にした、という点である。既存建物は佳代さんの実家で、1階、2階は両親の仕事場、3階には祖父母が住んでいたがすでに亡くなり、現在は3、4階に両親と弟さんが住んでいる。同居のきっかけは両親の高齢化だが、もともと手狭だったとのことで、彼らに残された場所は駐車場だけだった。

## 駐車場に住む

既存空間は間口が内法で2950mm、奥行き9400mm。まず隣地側の外壁沿いに若干の遮熱性を期待して水まわりを並べた。幅は819mm。この寸法はトイレと冷蔵庫のサイズから、つまり自力で縮小できない既製品のサイズから決められた。両親の仕事場側には遮音材を入れた厚さ131mmの壁を設けた。したがって室内はちょうど内法2000mm・奥行き6000mm、そこに3つのテーブルが設計事務所っぽく並んでいる。これらの造作はすべて、両面に厚さ4mmのラワン合板を貼った38mmの合板を用いてつくられている。床は既存のモルタルのままである。駐車場という機能的呼称が、土間という古来からの建築言語に読み戻され、仕立て直された。職住一体の土間暮らしである。ただし冬場はそうとう寒いだろう。自邸ゆえの覚悟である。

給排水は、コンクリートの破砕音による近隣への影響を考慮し、既存躯体に手を付けずに処理している。汚水は粉碎圧送ポンプを取り付けることで管の径を小さく抑え、壁裏を取り回して西側から外へ出し、既存配管に合流させている。電気配線は、既存のコンセントや照明器具で用いられていた取り出し口をそのまま活用している。

しかし、井原さんたちはここで寝ているのだらう。寝室と浴室がない。

## 寝室は近所のワンルームマンション

初期の設計図には最奥部に最小限の浴室と寝室が描かれているが、実現案ではなくなっている。狭すぎるからやめたのかと思ったらそうではなく、ふたりだけだったらこの場所でも職住一体にしたが、子どもが生まれたことがきっかけで寝室と浴室を切り離したという。確かに子どもの食事時間や就寝時間、入浴時間や夜泣きの時間は、ふたりの設計業務全般からまったく独立して発動するから、家が広ければ空間距離で対応できるが、ここでは不可能だった。つまり、建築家夫婦という似た者同士によってのみ均衡し得る超機能主義極小空間が、子どもという絶対的な他者の介入によって解体を始めたわけである。

そこで彼らは、近所のワンルームマンションを借りてそちらを寝室と浴室として使う、という決断をした。しかしそれは、ワ



写真左／入口脇のトイレ。キッチン、冷蔵庫、収納と同じ並びに配置されている。

Special Feature  
Even architects renovate their homes

Case Study

## 2

### 改修前



提供 / ihrmk

駐車場として使用していた頃の写真。手前にある既存のフォールディングゲートは、改修後もセキュリティゲートとして再利用している。

## オールインワン住宅の解体

ンルームマンションに家族生活がすべて移行するのではなく、寝室と浴室だけを移すというものだった。土間と板の間の暮らしを分けた、とも言えよう。いずれにせよ、ふたつでひとつの家だと考えた。それがこの家の、もうひとつの重要な特徴である。

街なかに複数の拠点をもって生活すると聞いて思い出されるのは、伊東豊雄さんが1980年代半ばに発表して話題となった「東京遊牧少女のパオ」である。コンビニの普及を契機に、住宅内の機能を都市にゆだねコンパクトに暮らすことが提案された。「はなれのはなれ」の場合は少し違って、生活に必要な空間をちよつとずつ都市内から入手して連携させていくという住み方である。これは、オールインワンであることがあたりまえの現代住宅に対する問題提起とも受け取れる。戦後近代社会が推奨してきた核家族に最適化させたプランニングがnLDKだとすれば、オールインワンは戦後社会の豊かさの象徴であった。所有する「豊かさ」という考え方もある。しかし、無理をして全部揃えることが豊かさなのか。もはや全部が同じように揃っている必要はないのではないか。風呂や台所がいらぬ人もいるし、共同でいいと考える人もいる。一方で子ども部屋や両親の部屋を一定期間だけ必要としている人もいる。そういう人たちは賃貸「住宅」ではなく、賃貸「部屋集合体」に合理性を感じるだろう。「はなれ

のはなれ」はそうした居住方法の実践例であり、住宅Ⅱ所有価値という社会通念に対する問いかけなのではないか。自家用車はUberによって、空き部屋はAirbnbによって、利用価値へと転換されつつある時代である。リノベーションを通じて、オールインワン住宅の解体と部屋の流動性が促進されたとき、この家はその見直しのきっかけとして記録されることになるだろう。



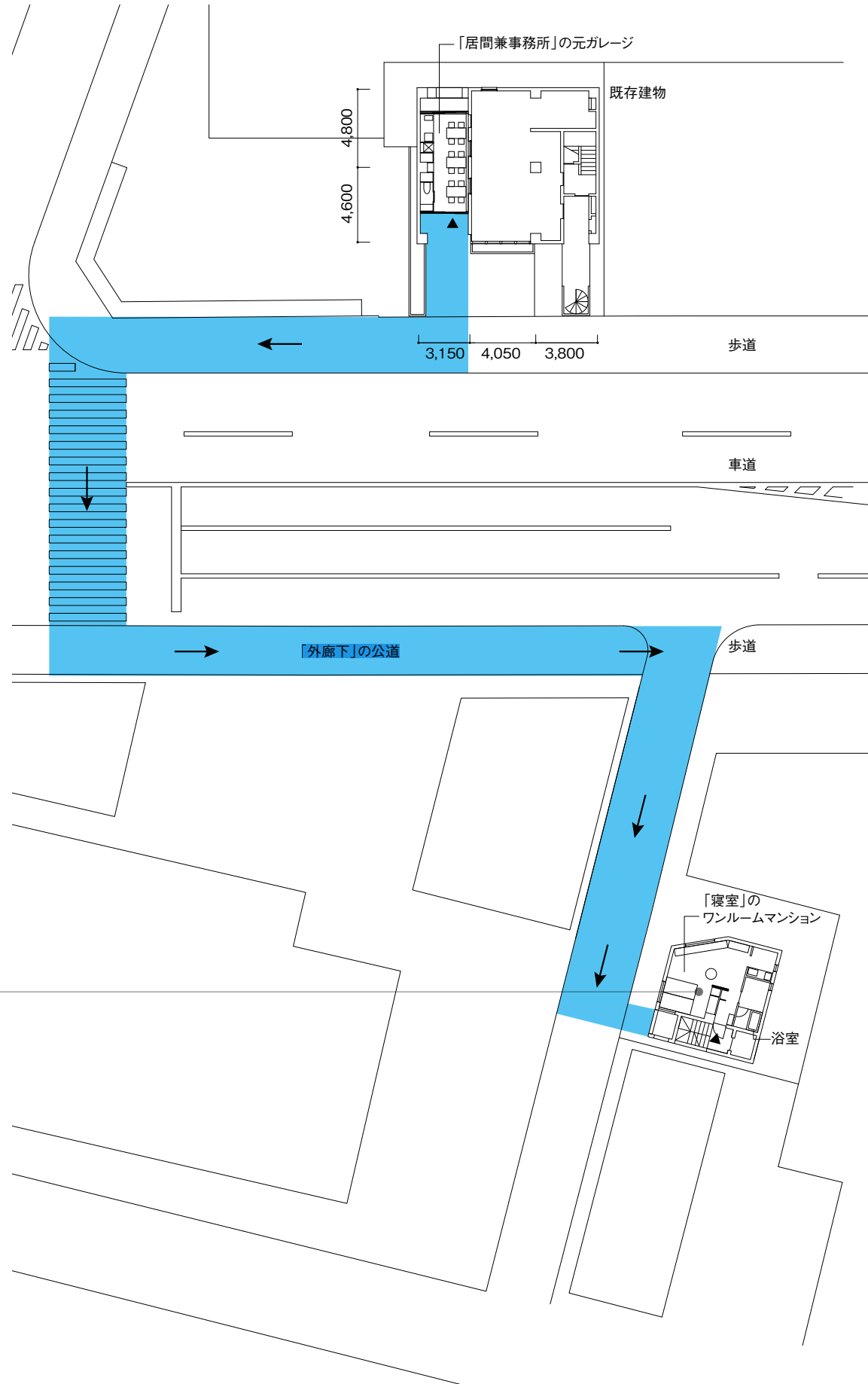
居間兼事務所の前面道路。家の「外廊下」と見立てている。この道路を渡って寝室のワンルームマンションと行き来する。

# 配置図

0 1 2m



1/350



寝室から居間兼事務所のビルを見る。



## 寝室



寝室として借りているワンルームマンション。設計は添田建築アトリエ。





## 「はなれのはなれ」

建築概要	
所在地	東京都港区
主要用途	住宅+事務所
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	井原正揮+井原佳代/ihrmk
構造	木造、既存部鉄筋コンクリート造
施工	todo
階数	地上4階(1階に居住)
敷地面積	172.53㎡
建築面積	112.30㎡
延床面積	413.47㎡
設計期間	2015年1月~6月
工事期間	2015年8月~10月

おもな外部仕上げ	
屋根	アスファルトルーフィング 遮熱塗料(既存)
外壁	東面: ラワン合板 t=4mm 自然塗料拭き取り 西面: サイディング無塗装板 t=14mm (既存部鉄筋コンクリート打放し)
開口部	木製建具
外構	既存鉄筋コンクリート土間スラブ現し

おもな内部仕上げ	
土間	
床	既存鉄筋コンクリート土間スラブ現し
壁	ラワン合板 t=4mm 自然塗料拭き取り
天井	既存鉄筋コンクリート天井スラブ現し
トイレ・収納1~3	
床	木下地構造用合板 t=12mm、 ラワン合板 t=4mm 防水処理 自然塗料拭き取り
壁・天井	ラワン合板 t=4mm 防水処理 自然塗料拭き取り

改修工事費	
建築	2,762,000円
空調	242,000円
衛生	861,000円
電気	699,000円
総工費	4,564,000円



Ihara Masaki

### 井原正揮

いはら・まさき/1980年福岡県生まれ。2002年名古屋大学工学部社会環境工学科卒業。06年東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻中退。07~14年シーラカンズアンドアソシエイツ。15年ihrmk設立。

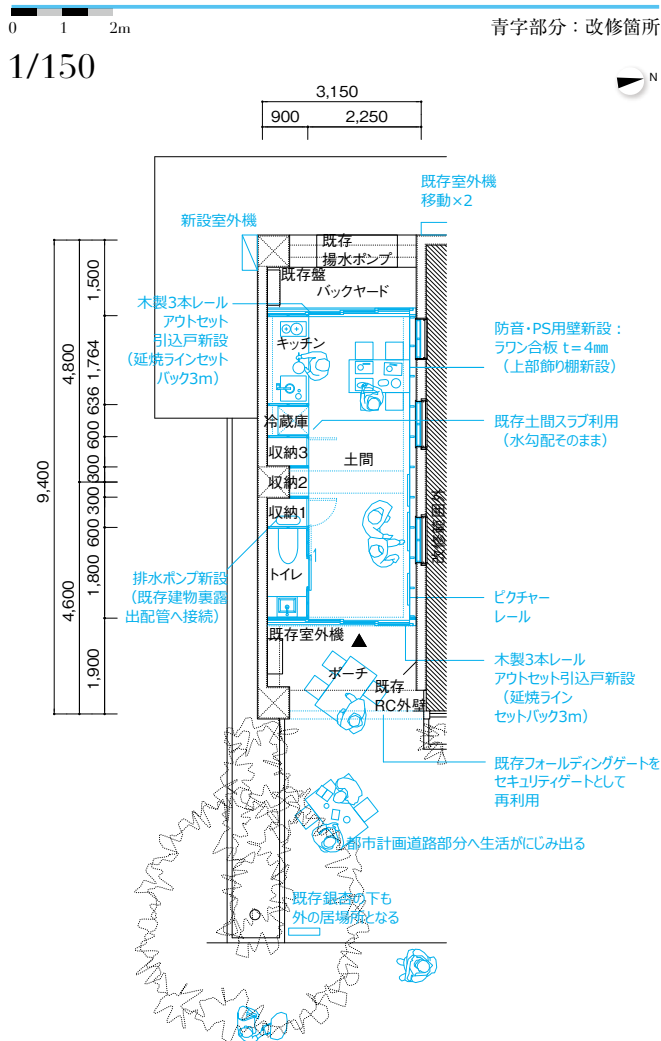
Ihara Kayo

### 井原佳代

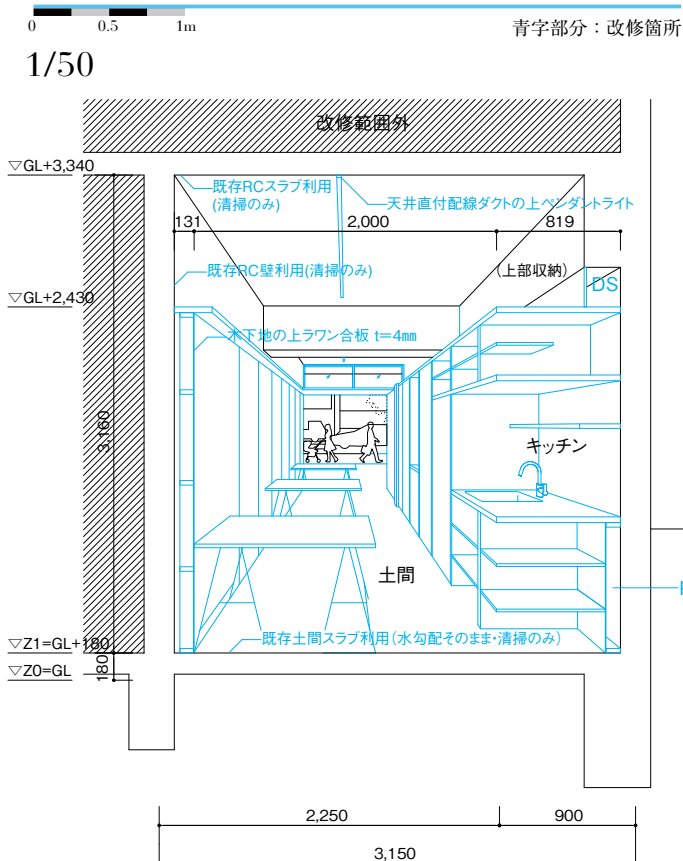
いはら・かよ/1979年東京都生まれ。2002年神奈川大学工学部建築学科卒業。04年キングストン大学大学院美術・デザイン・建築学部修了。09~16年シーラカンズアンドアソシエイツ。16年ihrmk。

おもな作品 = 「風景を通す家」(14)、 「素木地の治療院」(16)、 「ひな壇基礎の家」(17) など。

## 「居間兼事務所」の平面図



## 「居間兼事務所」の断面図



# 3

特集／建築家の自邸も、リノベーション

ケーススタディ3

# ラフなものこそ、ラグジュアリー

建築家・住人／浅子佳英

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

## Case Study

建築家・浅子佳英さんによる築30年ほどの商品化住宅の自邸改修。  
100万円というわずかな予算で、ぜいたくで、ラグジュアリーな空間を目指した。  
きれいな仕上げが、いたるところにある現代では、  
むしろ、その場にしかないラフな仕上げのほうが、ぜいたくなのではないか。  
現代らしいデザインを、挑戦的に探究している。

取材・文／杉前政樹 写真／傍島利浩

2階のリビング兼アトリエ。4室と納戸に仕切られていた2階を、大きなワンルームのスペースとした。木質パネル工法の住宅であるため、柱のない空間を実現している。



写真左/ワンルームの中に、黒い箱のコアが設けられ、水まわり（バスルーム、キッチン）がまとめられている。

2階だけでも4部屋75㎡、若い夫婦にとつては十分な広さである。間仕切り壁は既存のまま壁クロスをはがし、床にグラインダーをかける程度の改修で、5年ほどのあいだは完全に上下階に分かれた二世帯同居を続けていた。やがて娘が生まれ、事務所と生活空間の混在が難しくなってくる。

100万円まで  
どこまで  
ぜいたくな  
空間が  
つくれるか

東急東横線の学芸大学駅からほど近い住宅地。外観は、築30年ほどの、ごくありふれた商品化住宅のそれであるが、外階段を上って扉を開けると意表をつかれる。がらんとした禅堂のような大空間に、巨大なテーブルとシンブルな照明。適度にほの暗く、セレクトショップのようなシックな雰囲気である。建築家・浅子佳英さんの自宅兼事務所には、設計事務所につきもののパソコンも資料集もなく、所員は現在1名。なぜこんな大空間を必要としたのだろうか。

「ここは妻の実家で、両親は1階に住み、2階が丸ごとあいていたので、10年ほど前から二世帯同居するようになりました。そのときに、まず内階段をなくして外階段を付け、天井をはがして小屋組を露出して断熱材を入れ、バスルームとキッチンの水まわりを2階に新設。1期工事には300万から400万円ほどかかっています」と浅子さん。



写真上／リビング兼アトリエの奥にある本棚。棚や床の材料は、数カ月のあいだ外部に放置して退色させることで、荒く生々しい表情になるようにしている(23ページ参照)。

2階のリビング兼アトリエ。玄関側を見る。奥のハッチから1階に下りることができる。天井をはがして現しになった屋根構造は、真東のないフィントラス。

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

# 3

写真左／2階のハッチをあけて1階を見る。1階はまるで地下のように感じる。1階には階段下の小アトリエと3つの個室がある。



また1階に住んでいたご両親が後に亡くなられたことから、この家に転機が訪れることに。2期工事がスタートした。

「当時の私は建築を離れて、思想家の東浩紀さんと出版社(コンテクチュアズ)を立ち上げて活動していたのですが、2012年に退社することになり、出資金の100万円が戻ってきました。じゃあこの資金を使って改修しようと考えたのですが、業者に頼むと大きなテーブルをひとつ製作したらそれでおしまい。幸い時間はあったので、2期工事はセルフビルドでどこまでおもしろいことができるか、挑戦してみようと思ったのです」

東日本大震災を経て、建築界ではリノベーションに注目が集まっていたのだが、ク罗斯をはがした「ラフデザイン」の家に長らく住んでいた浅子さんは「そういうのにはもう飽き飽きしていた」。そこで打ち出したテーマが「ラグジュアリー」。建築は安く合理的につくらねばならない、といわんばかりの昨今の風潮の逆をいく提案である。では建築にとって「ぜいたく」とは何か。ヒントになったのはレム・コールハースの



1階の子ども室。独立した家のような造り。



1階のアトリエ。浅子さんの仕事場として使用。



1階の寝室。補修部分やビス跡などを白色のパテ処理。

「録音はスムーズで、ライブはラフだ」という言葉だった。商業主義が高度に発達した現代では、ノイズのないスムーズな録音CDよりも、ライブでその場限りのラフな音を体験するほうがむしろ「ぜいたく」、つまり「ラグジュアリー」だという考え方である。結局、その考えに共感した浅子さんは、現代的な新しいラグジュアリーのあり方としてのラフを追求することにした。

## 広々とした ぜいたくな 共有空間と ぎゅうぎゅう 詰めの 個人空間

そこで、床のコンパネ材や本棚の木材は雨ざらしにして、退色したグレーの色や雨

染み模様そのものを味わいとして生かした。高価で高品質な建材よりも、長い年月と風雨に刻まれた、その場でしか出せないラフな素材感こそが現代的ぜいたくなのだ。「それだけではつまらないので、規格化住宅（小堀住研）の木質パネル工法という特性を生かして、2階は壁面を全部取り払って広々としたぜいたくなワンルームにする一方で、1階はさまざまな種類の小さな部屋をぎゅうぎゅう詰めにしていきます。床下収納みたいな扉を開け、地下に潜るようにはしご状の階段を下りると、なぜか窓の外に通行人が歩いている。この空間感覚のギャップがおもしろいと思ったのです」

寝室は4畳、妻の書斎は3畳、子ども室にいたっては2畳の極小スペースだが、それぞれの素材や色を家族の好みに合わせて変化をつけ、内装から家具まですべてひとりでコツコツと3年かけて製作してきた。材料費はトータルで100万円。

「雑誌に図面を掲載するときは、材料費の

明細を書くようにしたんです。かなり安価であることがわかり、雑誌を読んだ人が自分でも始めたいと思えるようにしたかったです。材料は、ネットや都内のホームセンターで買っていました。スタッフのホームセカットの腕前がよいところや、単価や送料など、当時は暗記していました(笑)」

安価な建材の選び方を惜しみなく公開し、一般の人がDIYで自分らしいインテリアをつくることを応援する一方で、建築家がリノベーションの仕事ばかりを手がけること自体は、じつはあまり肯定的にとらえていないという。

## 建築家にしか 発揮できない デザインの 力を信じて

「今の日本では、予算と工期に合わせた手

強い設計をするのが建築家の職能、という風潮があるように感じています。先日訪れたニューヨークは大変好景気で、再開発地区では新奇なランドマーク建築が競って建てられていました。パブル的なものがよいとは言わなければいけません。デザインが重要視されないと、東京が世界的に魅力ある都市として生き残っていくことはできないでしょう。社会的な課題であるリノベーションも重要ですが、それだけでは都市の活力は生まれません。建築家が本来果たすべき〈デザインの力〉を発揮する局面は、まだまだあると信じています」

建築とインテリアを手がけ、思想家たちと議論を戦わせるユニークな活動を続けてきた浅子さん。長い時間をかけた自邸の改修を通して、新しい〈デザイン〉を挑戦的に探究している。それは、衰弱しつつある「建築家という職能」そのものをリノベーションしたいという静かな意志の表れのようにも思えた。



写真右／木毛セメント板を現しにして用いた玄関扉と内壁。材料の表情は荒々しいが、端部はきれいに納めている。左／玄関脇の壁面。既存のビニルクロスをはがした裏紙を現しにしている。白色部はパテ処理。



Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

# 3



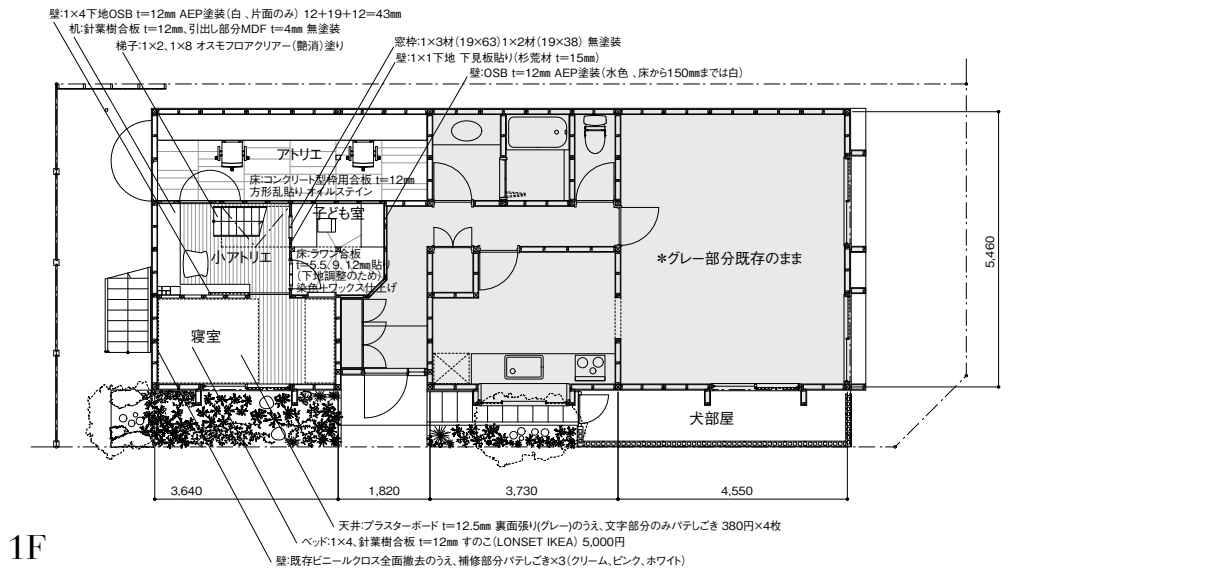
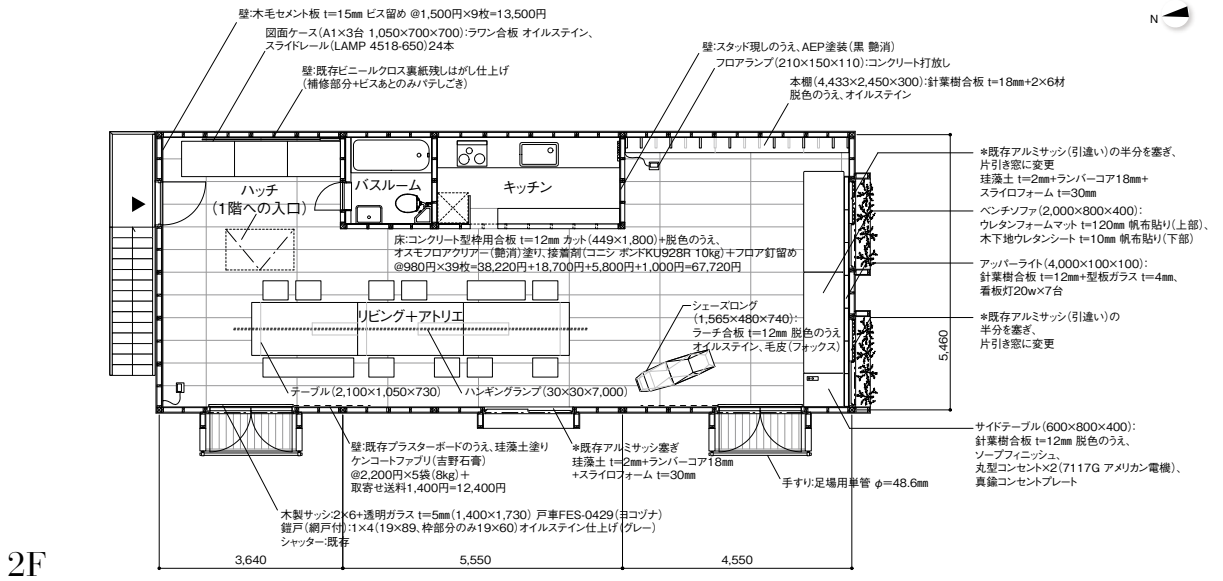
写真右／数カ月のあいだ外部に放置した、棚の合板と2×6材。左／同様に外部に放置した合板で作られたシェーズロング（長椅子）。ル・コルビュジェのアニマル柄を意識して、狐の毛皮を敷いている。



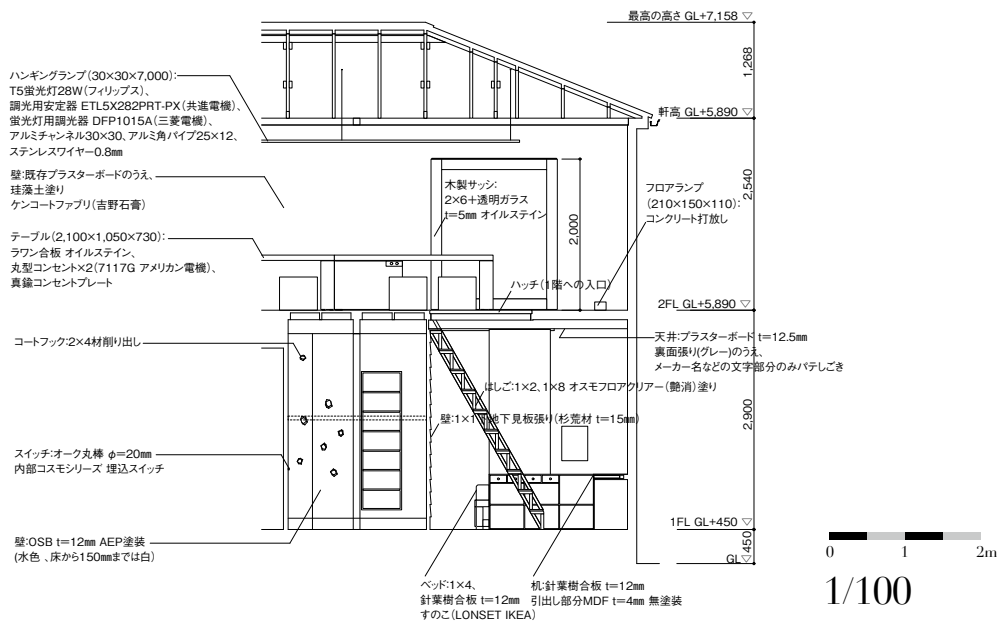
# 改修後の平面図

0 1 2m

1/150



# 改修後の断面図







南西側から見た外観。今回の改修は内部のみで外部は手をつけていない。



外付けの鉄骨階段。2階にある玄関のアプローチになっている。

## 「Gray」

<b>建築概要</b>	
所在地	東京都
主要用途	住宅、アトリエ
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	浅子佳英/タカバンスタジオ
構造	木質パネル工法
施工	浅子佳英/タカバンスタジオ
階数	地上2階
敷地面積	128.96㎡
建築面積	81.77㎡
延床面積	149.49㎡
設計期間	2012年3月~2013年12月
工事期間	2012年6月~2015年1月
<b>おもな内部仕上げ</b>	
床	コンクリートパネル脱色のうえ、ワックス仕上げ
壁	珪藻土(吉野石膏)、PB既存クロスはがしのうえパテ処理仕上げ、木毛セメント板 t=15mm、木軸現しのうえAEP(黒)
天井	強化PB(グレー)
<b>改修工事費</b>	
残材処分費	100,000円
2階床仕上	67,720円
2階壁仕上	25,900円
1階壁仕上	約100,000円
1階床仕上	約20,000円
そのほか造作、家具、雑費など	約500,000円

※材料費のみ。給排水衛生設備、電機、外部階段、1、2階ドア、2階天井工事は別途。

Asako Yoshihide

### 浅子佳英

あさこ・よしひで/1972年兵庫県生まれ。94年大阪工業大学工学部建築学科卒業。建築設計事務所、インテリアデザイン事務所を経て、2007年タカバンスタジオ設立。09年東浩紀らとともにコンテクチュアズ設立、12年退社。おもな作品=「Gray」(15)、「八戸市新美術館」(設計中、西澤徹夫との共同設計)など。



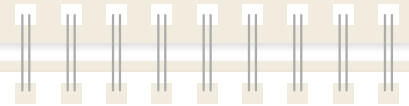
## 改修中



浅子氏自らセルフビルドによって施工した。安い工事費は、そのため。

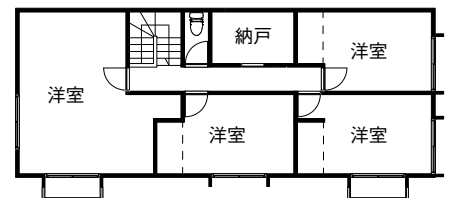
退色した荒々しい表情を生み出すため、あえて外部に放置している合板。

提供/タカバンスタジオ

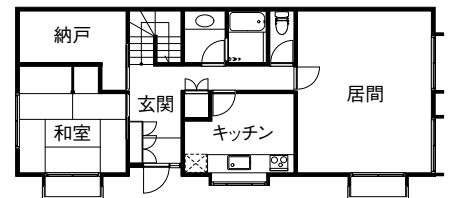


### 改修前の平面図

0 1 2m



2F



1F

N 1/250

永山祐子氏は、自邸として、  
築43年のマンションの一室を購入し、改修した。  
子育て環境のことを考え、もともとは新築の平屋を求めているが、  
それに代わるものをマンションの最上階に発見。  
既存建物のみごとな再解釈を行っている。

取材・文／大山直美 写真／山内紀人

建築家・住人／永山祐子

特集／建築家の自邸も、リノベーション

ケーススタディ4

# マンションの最上階に、天空の平屋



2層あわせて188㎡ほどのメゾネット住宅（7～8階）。8階は既存の間仕切りを取り払い、125㎡ほどの広いワンルームになっている。

## 建物の 選びが 重要だった

建築家なら一度は自邸を新築で建てることで表現を試みたいという欲望を抱きそうなのだが、永山祐子さんは近くに土地も買って準備していたにもかかわらず、途中で方向転換し、中古マンションを購入してリノベーションすることに決めたという。6年前に結婚、現在5歳と3歳の子どもを抱える「母」としての永山さんの理想は「子どもが走りまわれる平屋のようなおおらかなつくり」。限られた敷地面積で縦に積み重ねざるをえない都心の一戸建てでは、理想から遠ざかってしまうからだ。

事務所や実家に近いエリアを絞り、ネットの物件検索サイトで見つけたのが、現在の住戸。最寄り駅から徒歩数分、築43年、8階建てのSRC造で、売りに出ているのは7・8階のメゾネット。竣工時はオーナーの住居だったため、2層合わせて188㎡、しかも93㎡のテラス付きという破格の広さだが、売れ残っているのにはそれなりの理由があった。

元オーナーが売却したのち、この住戸は長く事務所として使われていた。その後、不動産業者が買いつけてシェアハウスにする計画を立てたが、管理組合の猛反対にあって頓挫。売主の不動産業者は値をかなり下げたものの、内部は事務所当時のまま、10室近い小部屋に仕切られ、キッチンも浴室もなし。一般客が購入して住まいとして

改修するにはあまりにハードルが高い物件だったのだ。

「私にとっては水まわりも一からつくれるので、むしろ好都合でした」と語る永山さんは、さらに値段交渉の末、解体工事費も売主側の負担で、スケルトンにしたうえで引き渡すことを条件に契約。その一方で、管理組合と交渉し、生活の中心である上階のサッシもすべて替えている。共用部にあたる窓サッシは通常、個々に交換することはできないが、この希望が通ったのも大きな収穫だろう。

## 8階にある 天空の平屋

完成した住まいは、7階が将来の主寝室と永山さんの仕事部屋で、8階はLDKと寝室が一体になった125㎡の一室空間。窓サッシはすべて特注で、南面は窓枠や框が床下に納めてある。室内からはほとんどガラスしか見えず、室内の床と外のデッキが連続し、なんとも開放的。まさに「天空の平屋」だ。

一方、一直線に延びるデスクを造り付けた西面は、すぐそばを幹線道路が走っているため、電動ブラインドを内蔵したトリプルガラスのFIX窓を採用。騒音はまったく聞こえず、ジオラマのような都会の風景が一望できる。北側の一角には建具で仕切れる寝室があり、現在はここに家族4人で寝ているが、将来はふたつに仕切って子ども室にする予定。隣の極集中型の収納には、衣類、布団、玩具など、日常使うもの



自宅でも仕事ができるように設けられた、7階のオフィス。

8階の室内からテラスを見る。まるで郊外の平屋のような広さのテラス。

がほぼ納まっている。

テラスは格好の遊び場で、南側だけでなく東の浴室脇にも出入口があるので、子どもたちは内外の別なく「とにかくぐるぐる走りまわってます」と永山さん。デッキの両脇には造園家の荻野寿也さんが実のなる木をたくさん植えてくれたので、子どもも鳥と競って実を摘んで食べているという。もうひとつの見どころは、随所に配したアートだ。ガラスのショーケースのような階段室にかかった2点は、階下の玄関前に配した1点との三部作で、作家の友人の写

真作品。一見むき出しに見える室内の壁はおおむねモルタル仕上げだが、この壁だけは解体中にはつた元の壁の荒々しい表情をあえて残している。

ちなみに階段室をガラスで覆ったのは、冬場の上階の暖気を保つ目的もあるという。床暖房は電気とガスのハイブリッド方式で、快適で光熱費も驚くほど安いそうだ。断熱性や気密性、遮音性といった目に見えない性能にはしっかりお金をかけたと永山さんは言う。

子どもが小さいから階下への音が気になる」とマンションの1階を選ぶ人は多いが、最上階のメゾネットならその心配もない、まわりを建物に囲まれた専用庭よりテラスのほうが眺めもよく、開放感もある。動く電車や車が見下ろせる環境も、音さえ遮断できれば、子どもにとっては見飽きない楽しい風景なのだろう。どこにいても家族の気配が感じられるので、寝かしつけた子どもが不安になって起き出すこともなくなり、「旅行から帰ってきてきても、子どもは『ここが一番だよ』』と言います」と永山さんは笑う。

新築の一戸建てでは決して手に入らなかった快適な空間を、中古マンションのリノベーションによって獲得した永山さん。その成功は、建築家の眼で、この物件を見つけた瞬間に半ば決まっていたといっても過言ではない。かつては最上階に広いオーナーの住まいがあったが今は空き室になっていくという、小規模な中古マンションは案外多いのではないか。新しい生活が開ける可能性を秘めたお宝物件は、人知れず都会の空中に漂っているのかもしれない。



8階。三面から光が入る  
明るい空間。新設したサ  
ッシは隠し框にすること  
で、ガラスだけに見える  
ようにしている。

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

# 4



西側の横長窓には、デス  
クが造り付けられている。  
ブラインドが内蔵された  
トリプルガラスは断熱、  
防音にもすぐれる。



写真上／93㎡ほどのルー  
フバルコニー。庭が室内  
にも入り込み、内外が一  
体的に感じられる。

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes  
Case Study

# 4

写真右／ギャラリーにな  
っている階段室。川久保  
ジョイ氏の写真作品が飾  
られている。

写真左／7階、8階と連  
なり、8階から降り注ぐ  
光あふれる階段室のギャ  
ラリー。



## 改修中

間仕切りを取り払った軀  
体。窓際に柱のないラー  
メン構造のため、開放的  
な改修が可能だった。



提供／永山祐子建築設計



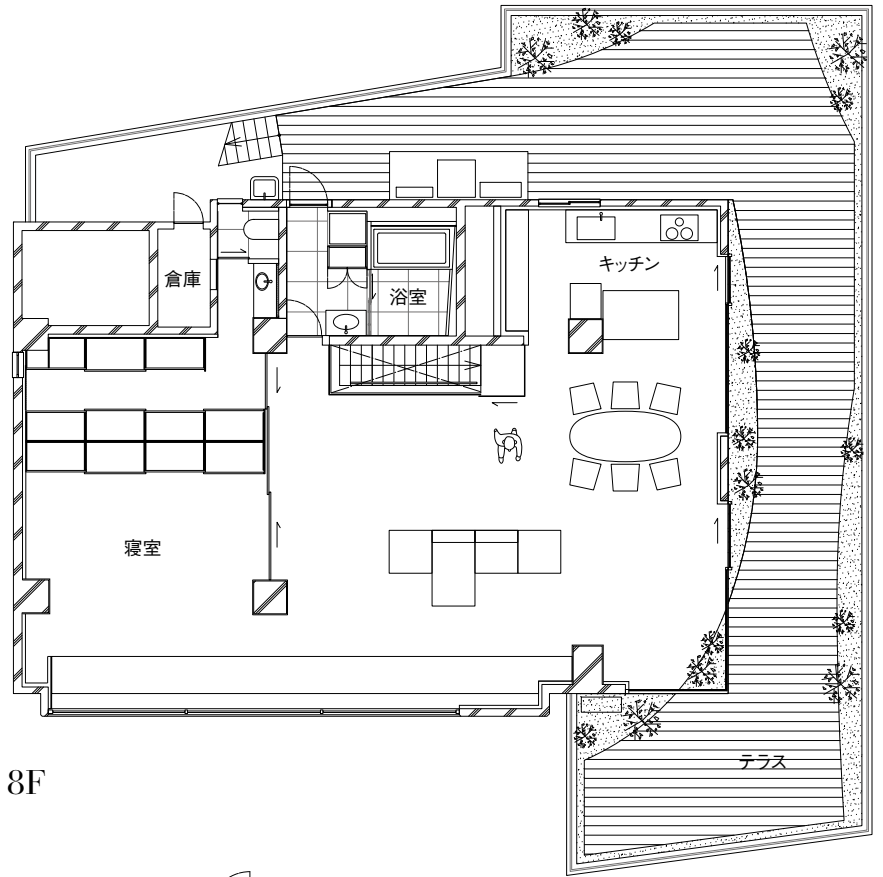
外観。上層階のテラスが広いのが特徴の8階建てのマンション。

## 「杉並の家」

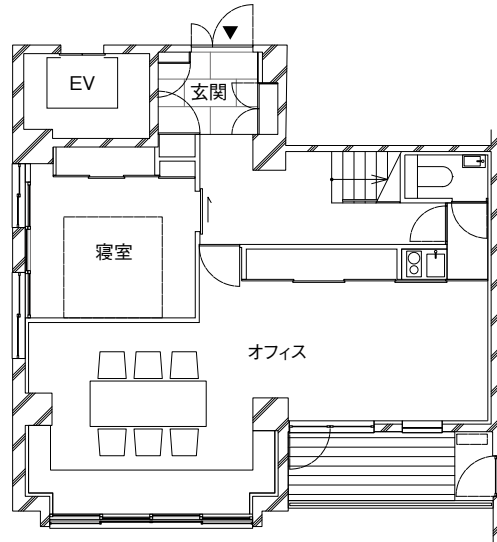
## 改修後の平面図

0 1 2m

1/150



8F



7F

### 建築概要

所在地	東京都杉並区
主要用途	住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	永山祐子／ 永山祐子建築設計
構造	鉄筋コンクリート造
施工	分離発注
階数	地上8階(7,8階に居住)
敷地面積	599.77㎡
建築面積	390.39㎡
延床面積	188.71㎡(住戸専有面積)
設計期間	2016年1月～12月
工事期間	2016年4月～12月

### おもな外部仕上げ

屋根・外壁	既存
開口部	制作スチールサッシ、一部既存
外構	ウッドデッキ

### おもな内部仕上げ

玄関	
床	セラミックタイル
壁・天井	既存
7階廊下	
床	フローリング
壁	既存、PB 塗装
天井	既存
7階寝室	
床	フローリング
壁	モルタル金ごて押さえ、 一部既存 塗装
天井	既存 塗装
7階事務所	
床	スギ合板 塗装
壁	スギ合板 塗装、 一部既存 塗装
天井	既存 塗装
8階リビング、ダイニング、キッチン、寝室	
床	フローリング
壁	モルタル金ごて押さえ
天井	木毛セメント板 塗装
8階水まわり	
床	セラミックタイル
壁	モルタル金ごて
天井	モルタル金ごて、 木毛セメント板 塗装



Nagayama Yuko

永山祐子

ながやま・ゆうこ／1975年東京生まれ。98年昭和女子大学生活科学部生活環境学科卒業。98～2002年青木淳建築計画事務所。02年永山祐子建築設計設立。おもな作品＝「カヤバ珈琲」(09)、「勝田台のいえ」(13)、「豊島横尾館」(13) など。

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

5

いたるところに鉄を用いた谷尻誠氏の自邸。  
築40数年のビルの1室を買い取り、間仕切りを取り払い、  
ほぼワンルームにしたうえで、床一面に鉄を敷いた。  
谷尻氏独自の趣向だが、同じ趣向の人もいるのではないか。  
価値観の合う人を探す、自身の感性のポートフォリオだ。

鉄でつくられたアイランドキッチン。工場で作ったパーツをつくり、現場溶接で組み立てたもの。床と同じ黒皮仕上げ。



特集／建築家の自邸も、リノベーション

ケーススタディ5

## 鉄のフローリングに住む建築家

取材・文／加藤 純 写真／桑田瑞穂

建築家・住人／谷尻 誠

床一面に貼られた鉄のフローリング。木と同じようなフローリング材（3種類の幅と長さ）をつくり、乱尺貼りしている。

キッチン側からLDKを見る。バスルーム、テラス、和室以外は鉄のフローリング。照明や家具の一部も鉄を用いたオリジナル。



原爆ドームを望む、太田川に面したビル。この上階に、広島と東京のふたつの拠点で事務所を営む谷尻誠さんが、週に1回の頻度で滞在する自邸がある。「街なかでも自然が感じられる川沿い」という希望を不動産業者に伝えて出て出合ったのは、ワンフロアが1住戸の物件だった。築40数年がたったSRC造の建物について谷尻さんは「同じ歳くらいの物件にひかれるのですね。東京の事務所や住まいも同じ時期に建てられたものです。今から見るとダメなところも多いのですが、ダメさを肯定したいというか……」と語る。

## 鉄という 制約を 課す

約120㎡の専有面積をもつ住戸の以前の間取りは、4LDK+納戸。個室は6畳程度に小割りにされ、LDKは外光の届かない中央に配されていた。谷尻さんは「全体の広さを一発で感じられる空間にしたい」と、既存のほとんどの間仕切りを取り払ってワンルーム化した。「高級ではなくても、無駄な空間を生かして豊かさを味わいたい」というねらいからである。続き間としてふたつあった和室は、片方だけが残された。床の間や船底天井が設えられた部屋は、畳表が取り替えられただけ。ワンルーム空間との仕切りは、元からあった透かしの入った襖を境にして、新旧が対比的に接することとなった。

新しくできた大きな空間全体をつなげる

のが、床一面に広がる鉄板だ。3種類の幅と長さにカットされた厚さ1・2mmの黒皮仕上げの鉄板が、ワンルーム空間の長手方向に乱尺で貼られている。もともと仕上げが想定されていなかった荒々しいコンクリート面とは暗いトーンで組み合わせられ、外からの光が床面に鈍く反射して住戸中央にまで届く。「鉄はやわらかい材料で、温かみを感じる。鉄という制約を自らに課して、自邸で使い切ってみなかった」と谷尻さんは語る。床の鉄板をあえてフローリングのような形状にしたのは、谷尻さんによると「床材に対する潜在意識を利用した」ため。あらかじめ鉄と知らされていなければ、入ってしばらくは鉄仕上げであることに気づかない人もいるだろう。一般的な住まいでは心理的な距離のある鉄という仕上げを、身近に感じさせるための操作である。

そして床だけでなく、キッチン什器や建具、植物のプランター、照明器具、オーディオアンプなどまで、鉄板やフラットバーなどを加工してつくられた。水まわりの鉄部には、防錆対策としてリン酸処理が施されている。また、建具の可動部は鉄のアンクルにボルトとナットで固定されて蝶番の代わりとされているように、いずれも素朴なディテールである。「既製品から選ぶのではなく、素の材料を工夫してつくっていった」と谷尻さんは言う。一貫して鉄でつくることには、コストを抑えるねらいもあった。必要となった工種は大工と金物業者、設備と電気程度で、一般的な住宅の工事に比べると圧倒的に少ない。これまでプロジェクトをともししてきた業者と協業することで、設計や現場での手戻りや手間も圧縮



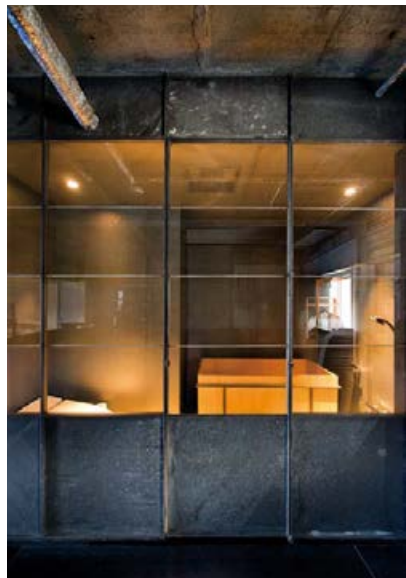
3,500×2,000mmの鉄製アイランドキッチン。内部は中空で、一部収納になっている。左側にバスルームがある。

Special Feature  
Even architects  
renovate  
their homes

Case Study

# 5

バスルーム。建具はリン酸処理されたスチールプレート。ヒノキを金輪でしめ、浴槽にも鉄を用いている。



される。総合的に、工事費を安く抑えることができた。

## 実験的な ポर्ट フォリオ

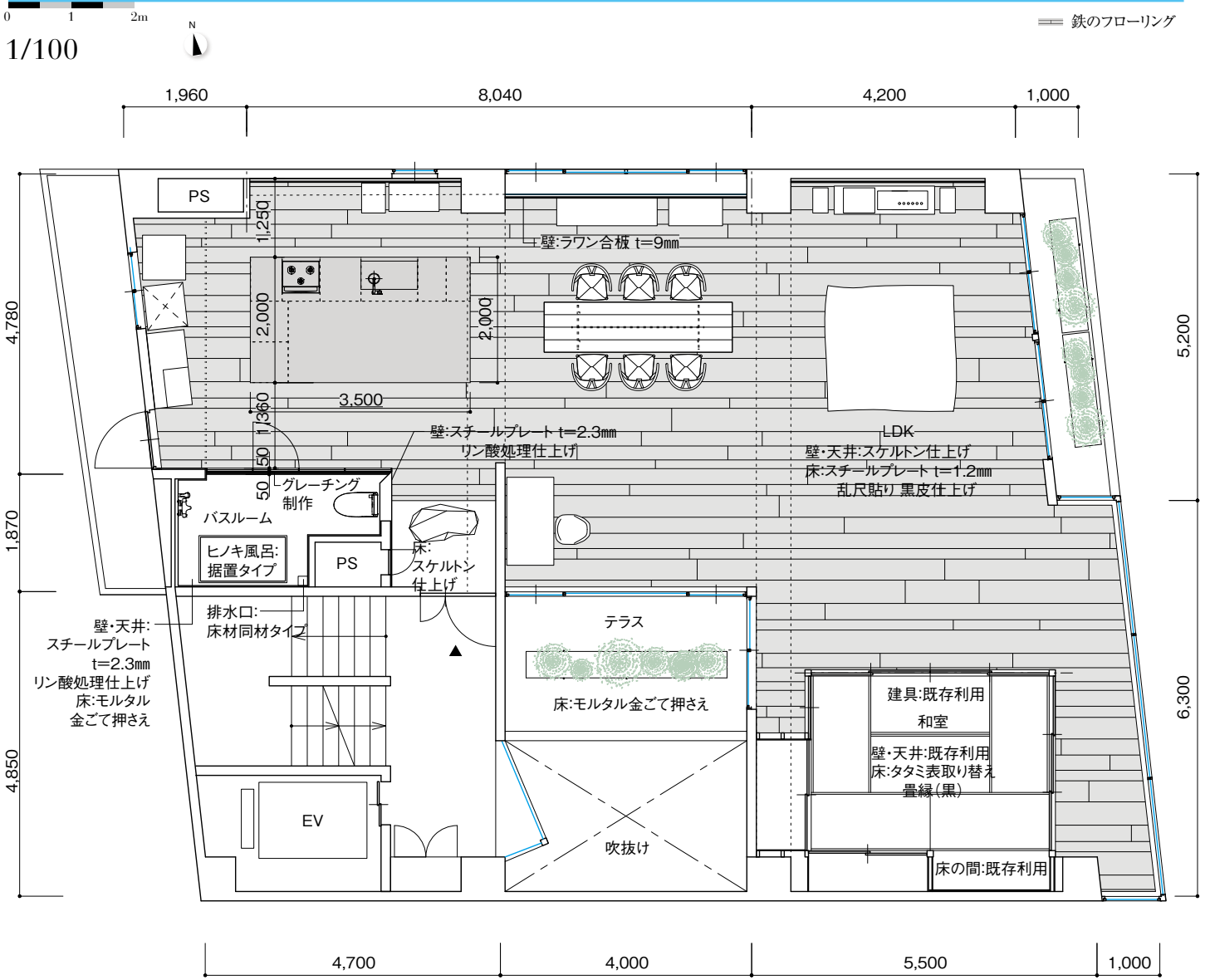
鉄を使い切ったのは、自邸ならではの実験的なニュアンスも含まれている。「普段の仕事で依頼を受ける方からは、まず出てこない要望でしょう。鉄の仕上げは寒いし暑いし、不便なことしかありません。真夏には目玉焼きがいくらでもできますよ。ただ、スリッパをはけば、暮らせないわけではない」と谷尻さんは、元はサンルームであった窓際のスペースを指差して笑う。鉄の床

には蜜蠟ワックスが塗られているが、ところどころに錆が出てくるという。それでも谷尻さんは、やりたいことを自分で実践してみようとして、不便さを実感しながら暮らし、体験として蓄積する。「世の中には『こういうのもいい』という人も

いるはずなのでですね。そうした方々に自分の経験をお伝えして、それでも鉄の仕上げを求められるようであれば、その方は家をだいにするはずですよ。谷尻さんは自身が古い町家で育ったこともあり、「便利だけの家は、人を衰えさせる」と考えている。「手がかかる子どもほどかわいい、とよく言われますよね。考えながら住むと、不便さは魅力に思えてくるのです」。谷尻さんが自虐的に表現する「ダメさ」によって住まい手の個性や能力が引き出され、家としての魅力に変換されていくのである。

快適な家が不便を感じないことを意味するのであれば、明らかに谷尻さんの家は適っていない。しかし、鉄やコンクリートといった生の素材に囲まれて、谷尻さんが駆け出しの頃に購入したという椅子やアート作品、ヤスリがけされた古道具がミックスして配された広い室内にみると、心地よさがじわりと感じられてくる。そして「感動は、ミスマッチや思いがけない体験から生まれる」という谷尻さんの言葉が、静かに響いてくる。

# 改修後の平面図



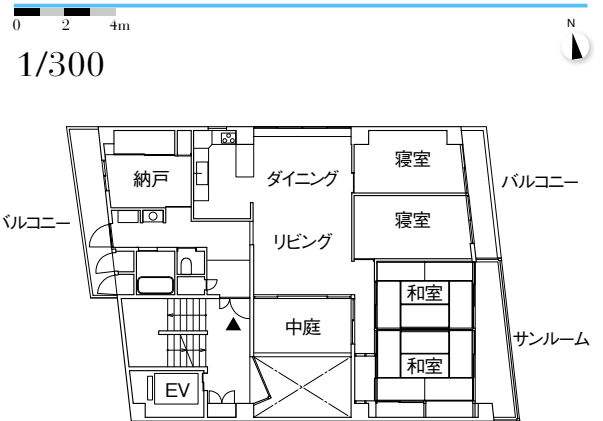
## 改修中



間仕切りや仕上げ材を取り払った状態。部屋は和室だけ残している。

提供/SUPPOSE DESIGN OFFICE

## 改修前の平面図





川沿いに建つビルのワンフロアが「広島の家」。

## 「広島の家」

<b>建築概要</b>	
所在地	広島県広島市
主要用途	住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	谷尻誠／ SUPPOSE DESIGN OFFICE
構造	鉄筋コンクリート造(既存)
施工	プロシード
階数	地上10階(5階に居住)
延床面積	118㎡
設計期間	2015年3月～10月
工事期間	2015年10月～12月
<b>おもな内部仕上げ</b>	
<b>LDK</b>	
床	合板下地スチールプレート t=1.2mm 黒皮仕上げ乱尺貼り
壁	スケルトン仕上げ、 一部ラワン合板 t=9mm
天井	スケルトン仕上げ
<b>浴室・トイレ</b>	
床	モルタル金ごて押さえ
壁・天井	スチールプレートリン酸処理仕上げ
<b>和室</b>	
床	畳表張り替え(縁:黒)
床の間・壁・天井	既存利用



Tanijiri Makoto

### 谷尻 誠

たにじり・まこと／1974年広島県生まれ。94年穴吹デザイン専門学校卒業。94～99年本兼建築設計事務所。99～2000年HAL建築工房。00年建築設計事務所SUPPOSE DESIGN OFFICE設立。14年より吉田愛と共同主宰。現在、穴吹デザイン専門学校特任講師、広島女学院大学客員教授、大阪芸術大学准教授。おもな作品＝「毘沙門の家」(03)、「ONOMICHI U2」(14)、「安城の家」(15) など。

共用部の階段室から玄関を見る。一般的なビルの中に鉄の空間がある。



和室。唯一、内装を含め、既存部分を残した部屋。鉄の床に置かれた和室は、まるで草庵茶室のよう。

青木茂氏が長年実践してきた「リファイニング建築」。  
既存建物のデザインや設備を新しくするだけでなく、耐震や断熱などの性能を、  
高水準の新築同様に刷新し、  
不動産価値まで高める。その効果を自ら実証するように、  
青木氏は自邸も、築40年の「リファイニング建築」でつくりあげた。

取材・文／伊藤公文 写真／川辺明伸

住人／青木洋子



特集／建築家の自邸も、リノベーション

ケーススタディ6

# 築40年が、まるで新築

建築家・住人／青木 茂

4階ダイニングキッチン。  
4階建ての賃貸住宅を購入して、全体を再生。3～4階に青木夫妻が自ら居住している。



Special Feature  
Even architects renovate their homes  
Case Study

# 6

もともと駐車場だったところを、ビルのエントランスホールとして改修。改修前に既存建物の躯体の健全度をチェックするために、駐車場部分を掘削して基礎を調査。

コンクリートの梁の上部を増し打ちすることで、8mのスパンを飛ばしている。窓下の腰壁などは、補強した分を、鉄骨下地の乾式壁にすることで軽量化。



## 自らの手法に より説得力を

建築家・青木茂さんの自宅は港区、地下鉄駅から徒歩数分の高台にある。建て込んではいないが、閑静な住宅地。4階建ての1、2階はそれぞれ賃貸住戸、3、4階のメゾネットが自宅で、4階のテラスからは眺望がきき、天空が大きく広がっている。

青木さん夫妻は長く大分県に住んでいたこともあり、東京のマンション住まいはいかにも息苦しく、また能の演者である娘さんの稽古場をつくるという望みもあった。夫人が自ら築40年の中古物件を土地勘とインターネットを頼りに探し出し、「リファイ

ニング建築」の主唱者である夫の青木茂さんにパトロンタッチ、プロジェクトが始動した。

築数十年のB級建築に手を入れ、A級建築としてよみがえらせ、末ながく使われるような状態にするのが青木流のリファイニング建築で、個人住宅、集合住宅、教育施設、オフィスほか、用途も異なれば、状況も千差万別の建築の再生を手がけてきた。

計画・設計者としてはまさに百戦錬磨。ただひとつ経験がないのが自ら事業主となって再生建築を手がけることだったが、図らずもこの自邸プロジェクトで初めてそれを経験することになった。

経緯は後まわしにして結論をいえば、プロジェクトは成功裡に終わった。家族は住

み心地に十分満足し、賃貸住戸はつねに借り手がついている。しかしそれより青木さんにとって最大の収穫は、検査済証がなく、図面も満足にない築数十年の建築を再生して使いつづけることが、壊して新築するよりはコスト、環境、使い勝手など、さまざまな点でメリットがあり、事業計画として十分に成り立つことを自らリスクを負って証明したことだったという。経験の深さと広さでは人後に落ちない青木さんだが、それでもプロジェクトの成約率は3割になかなか届かなかったという。再生の提案をし、詳細な討議、検討が行われた挙句、やはり新築にするという事例が多いようだ。しかし、このプロジェクトの成功によって自信を深め、伴って提案への信頼度が高まり、

成約率の上昇に寄与したのだという。

## 自邸でも 徹底した 性能アップ

再生の過程はこれまでの経験の範囲内に収まるものだったそうだ。

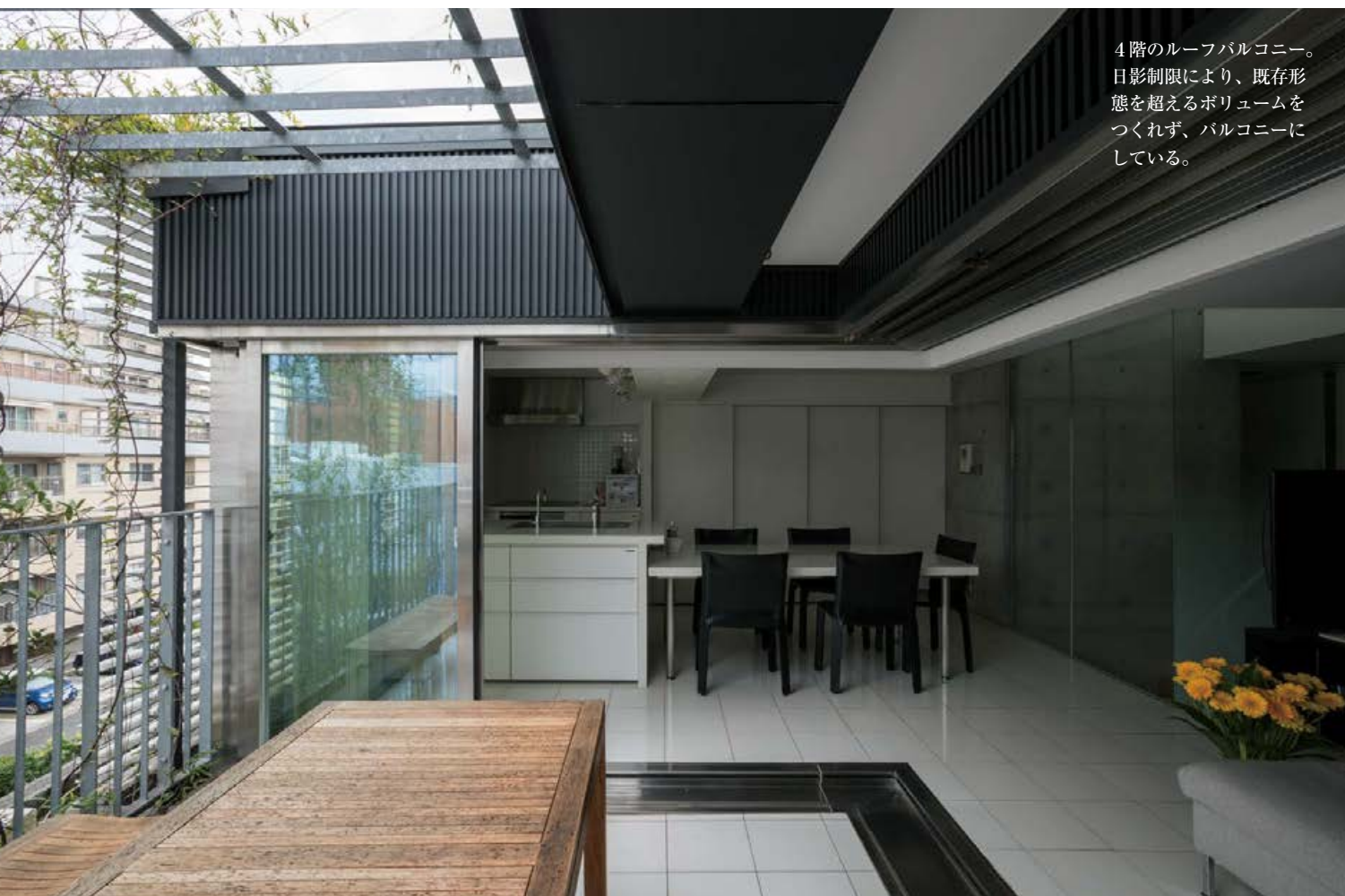
「検査済証が下りなければ解約する」という条件で、基礎や躯体の調査・診断を自らの負担で行い、大丈夫と判断して契約した後で青木流リファイニングに則って進行する。

躯体の全数調査を経て構造計算書を復元、既存不適格を証明した後、不要なRC壁な





前面道路側の外観。日射の抑制とプライバシーの確保のため、ルーパーを新設している。

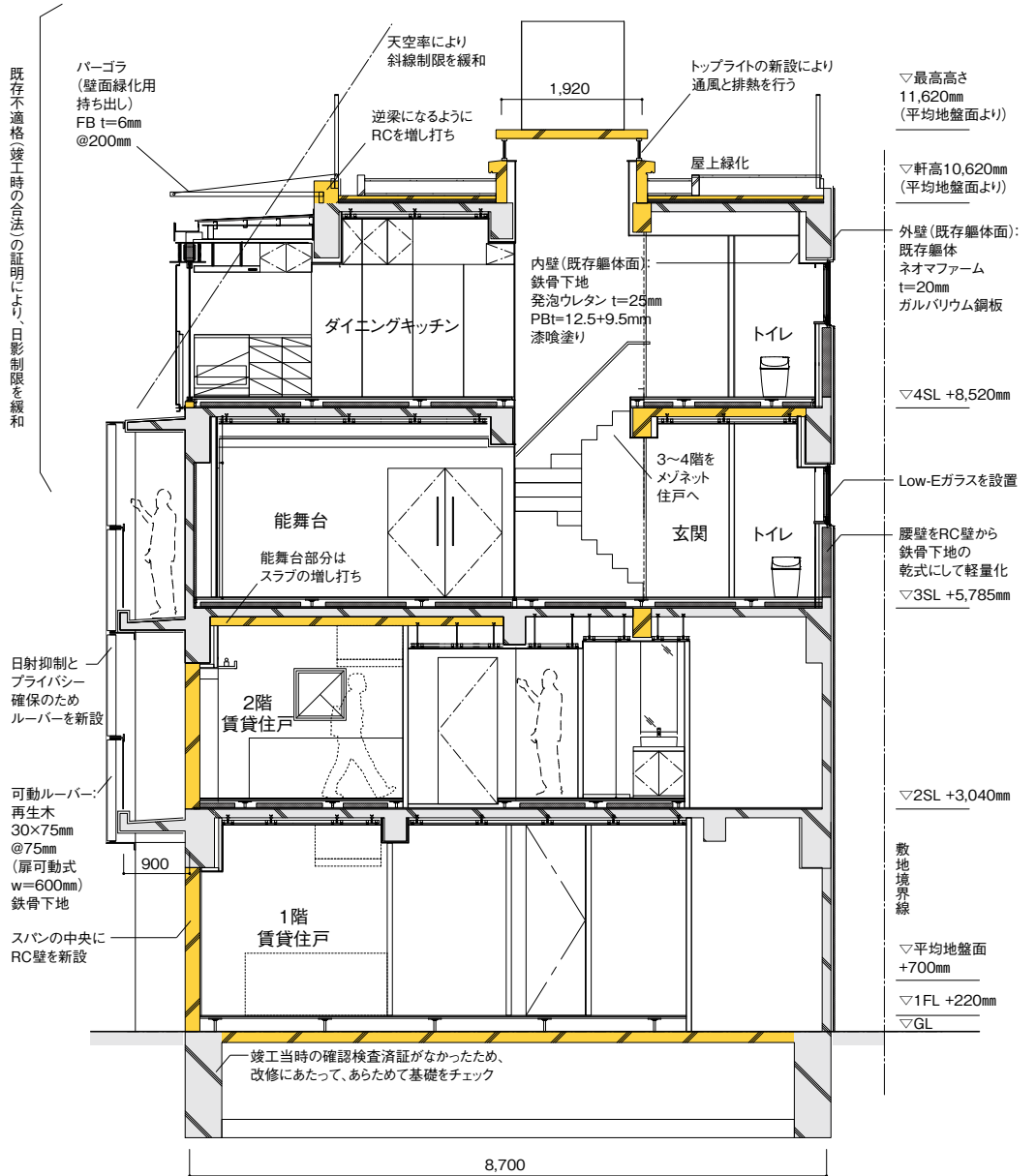


4階のーフバルコニー。日影制限により、既存形態を超えるボリュームをつくれず、バルコニーにしている。

# 改修後の断面図

0 1 2m  
1/100

RC既存躯体 新規RC躯体



3階の能舞台。能の演者である娘さんのために設けられた。床スラブを増し打ちしている。



屋上。補助金を得て緑化し、笠木には高反射塗料を塗布することで、環境負荷軽減を行っている。

などを撤去、エレベータ・コア壁や袖壁をバランスよく新設して耐震補強を行う。容積と日影の既存不適格による緩和によって当初のボリュームを確保しつつ、4階ではバルコニーを広げ、天空率による緩和を利用してダイニングキッチン部分の張り出しを設ける。2、3階の道路側のファサードには対面するマンションの視線をさえぎるべく

再生木のルーバーを設置し、外まわりのRC壁は内外を断熱材でくるみ、さらにガルバリウム鋼板を張ってコンクリートの中性化を防いで長寿命化を図り、また階段室の吹抜けを利用した通風と自然光導入、屋上緑化などの環境配慮も行う。これらの多くについて、工事費の約14%にあたる補助金を得ている。竣工時の資産価値は取得時総費

用の25%増と試算されるといふ。その後、クライアントにすすめるために、自らも補助金申請の経験を積みかかったのだ。新築と違い再生の場合は、計画・設計の段階でも現場の段階でも、つねに想定外の事態が待ち構えている。それを乗り越えるにあたっての青木さんのスタンスはいつも変わらず正面突破。障害を回避せず、安易

な便法によらない。透明性と公開性を徹底し、関係者の合意をうながし、修繕箇所の全数を記録し、設計図とともに家歴書(カルテ)として残して、資産価値を高めるとともに、次の改修の備えとする。そうした王道を踏む青木流リファイニングの小さな結晶が、この自邸であるにちがいない。



3～4階へのおもな動線として、エレベータを新設。その鉄筋コンクリートのコアによって、構造補強も行っている。上部にトップライト。



写真上／3階から4階に上がる階段。上部にトップライトがあるため、外光が入ってくるだけでなく、風や熱の通り道になっている。

Special Feature  
Even  
architects  
renovate  
their  
homes

Case Study

# 6

写真下／3階の玄関。エレベータは玄関扉の外にある。4階の室内へは、セキュリティを解除しないと、エレベータで直接上がることはできない。



## 改修前



写真上／外観。建設時に合法だった「既存不適格」であることを証明するため、躯体などを調査。中上／軽量化のために一部撤去されたバルコニー。



写真中下／4階の賃貸住戸。和室など、個室に区切られた間取りだった。壁を取り払い、ワンルームの空間に改修された。下／4階のバルコニー。

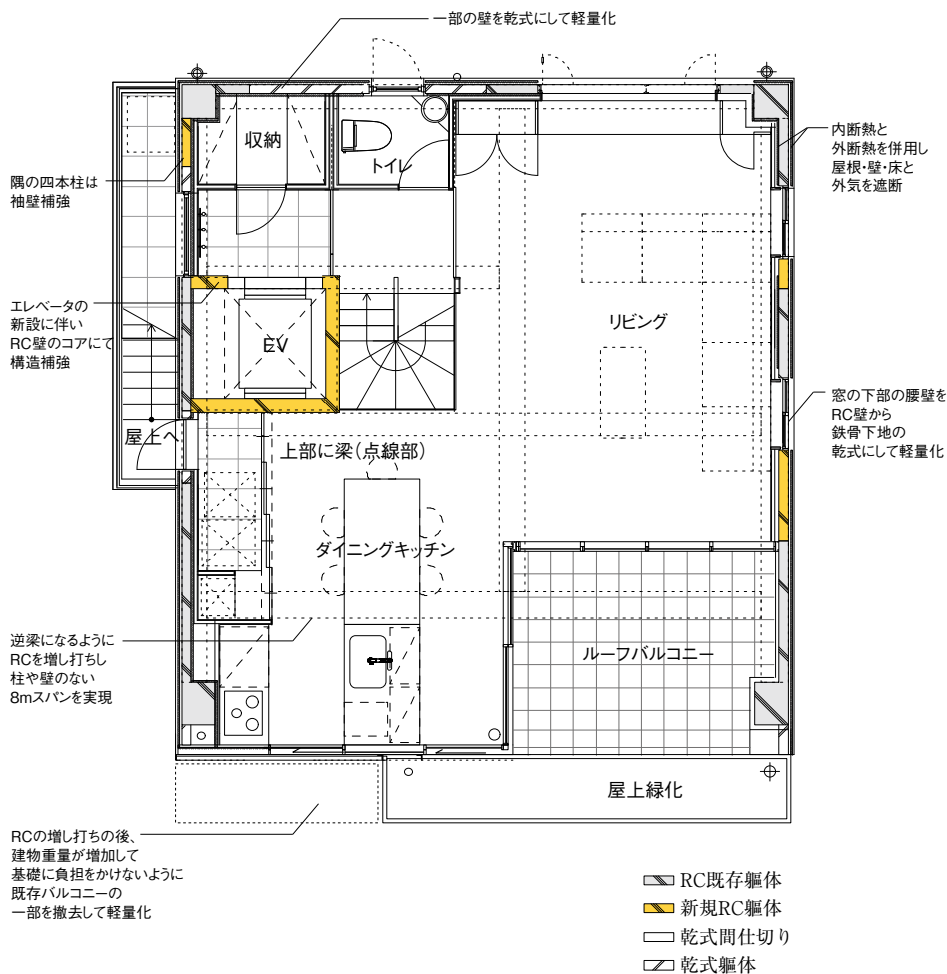


提供／青木茂建築工房

## 改修後の平面図

0 1 2m

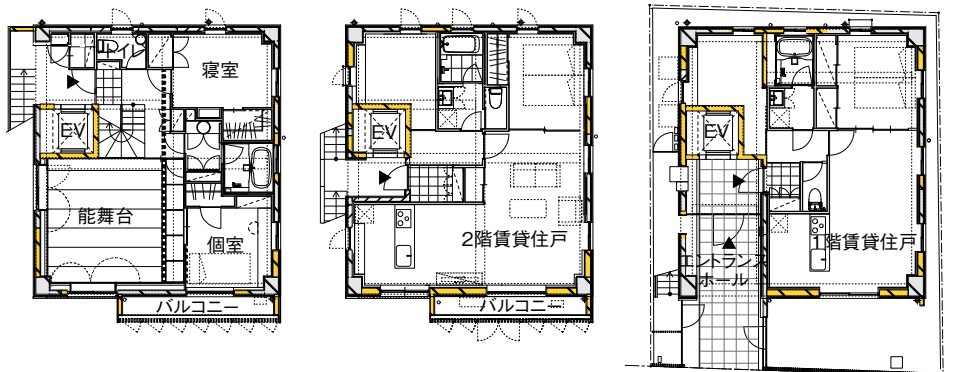
1/100



4F

0 1 2m

1/250



3F

2F

1F



外観。天空率を導入することにより、斜線制限が適用されず、ダイニングキッチンを広くできた。

## 「YS BLD.」

### 建築概要

所在地	東京都港区三田
主要用途	共同住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	青木茂／青木茂建築工房
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
施工	さとうベネック
階数	地下1階、地上4階、塔屋1階(3、4階に居住)
敷地面積	115.21㎡
建築面積	68.63㎡
延床面積	253.86㎡
設計期間	2010年1月～7月
工事期間	2010年8月～2011年2月

### おもな外部仕上げ

屋根	屋上緑化
外壁	ガルバリウム鋼板
開口部	アルミサッシ+Low-Eガラス
外構	屋上緑化、庭植栽

### おもな内部仕上げ

<b>3階寝室・納戸・洗面所・便所</b>	
床	合板フローリング
壁・天井	PB t=9.5+9.5mm 寒冷紗パテしごき、漆喰塗り
<b>3階舞台</b>	
床	ヒノキ無垢板張り
壁	PB t=9.5+12.5mm 寒冷紗パテしごき、松突板貼り、鏡貼り
天井	PB t=9.5+9.5mm 寒冷紗パテしごき、漆喰塗り
<b>4階リビング・ダイニング</b>	
床	磁器質タイル300mm角貼り
壁・天井	PB t=9.5+12.5mm 寒冷紗パテしごき、漆喰塗り
<b>4階ルーフバルコニー</b>	
床	磁器質タイル300mm角貼り
壁	ガルバリウム鋼板
天井	珪酸カルシウム板 t=6mm VP塗装、スチール亜鉛メッキ、ルーバー

### 改修工事費

建築	37,000,000円
空調	7,500,000円
衛生	9,900,000円
電気	5,500,000円
総工費	70,000,000円

※うち、14,000,000円は補助金を得ている。

Aoki Shigeru

### 青木 茂

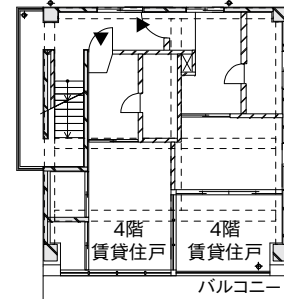
あおき・しげる／1948年大分県生まれ。71年近畿大学九州工学部建築学科卒業。77年アオキ建築設計事務所（現・青木茂建築工房）設立。2007年東京大学大学院にて博士号取得。現在、首都大学東京特任教授、大連理工大学、日本文理大学、眉山女学院大学客員教授。おもな作品＝「宇目町役場庁舎」(99)、「八女市多世代交流館」(01)、「北九州市立戸畑図書館」(14) など。



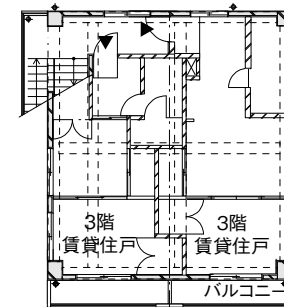
### 改修前の平面図

0 1 2m

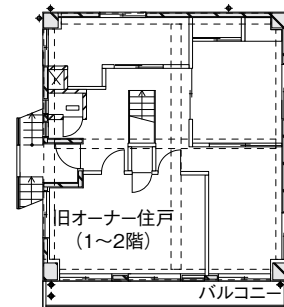
1/250



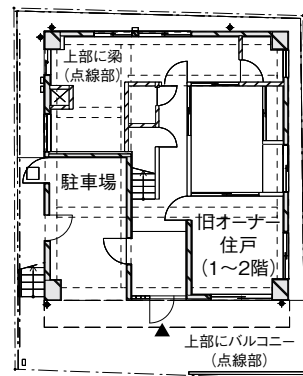
4F



3F



2F



1F

バスルームも明るく広く優雅そのもの

旅先で真っ先に感じるものは、いってみれば空気のようなもの。

気温、湿度、においなどで、環境ががらりと変わる。もちろん、風物、人の姿、言葉などの違いでその土地ならではのものを感ずるのだが、一番はやはり空気だ。

水彩で絵を描くとそれがよくわかる。絵の具の混ぜ方とか乾き方みたいなものが各地でまるで異なる。描いた絵を後で見ると空気を思い出す。そしてゲストルームの実測スケッチ。これには寸法以外の情報もまわりついて、写真にはない何か詰まっている。

レイ・エマ・ハミルトンというオレンジ色をした美しいイギリスのバラがある。

それは、かのトラファルガー海戦（\*）でフランス・スペイン連合艦隊を破ったホレーシオ・ネルソン提督の愛人の名である。

イギリス人は「ハミルトン」という響きも好きだが、偉大な英雄「ネルソン」の話が大好きで、この南アフリカ・ケープタウンのホテルにもその名を冠してしまった。1階にはLORD NELSON ROOMと、まるで提督の部屋のような暗くいかめしい会議室である。格天井のような木の壁……その上部には海戦の額絵が並び、今にも提督の亡霊が現れそうだ。

バームツリーの中にたたずむ198室の5つ星ホテルは、あの頂部が平らなテーブル・マウンテンの直下にあり、高級なりゾートホテル。建物外壁こそ一部は淡いピンク色だがインテリアは例の部屋以外、廊下やゲストルームを含めて香るような白い優雅さであふれている。ダイニングルームも真っ白で床だけが白黒の市松柄。

目を射るような青空、揺れるバームの黒いシルエット、あざやかな芝生の緑、そして乾いた空気。そこにパウダーのようなコロニアルな白。

宿泊したゲストルームには奥行き深いバルコニーもある。明るいグレーのカーペットにさらに明るいグレーの紋

様。幅木や建具、建具枠、天井見切縁は白で、壁と天井は卵色の淡い黄緑がかったクリーム色というエレガントさ。カーテン、椅子張り、クッションなども抑えられた淡さで上品そのもの。そこにウエルカム・フルーツの青りんごのあざやかな演出。平面図こそ特徴があるというほどのものではないが、その優雅な雰囲気はどこにでもあるものではない。ダブルベイシンのバスルームは床と壁が明るいライムストーン。とても広い。

720mmという高さの、テーブル・マウンテンのようなベッドでリネンに身を沈めながら、眠りに落ちた。

\*Battle of Trafalgar…1805年10月21日にスペインのトラファルガー岬沖で行われたナポレオン戦争における最大の海戦。イギリスはこの勝利によりナポレオン1世の英本土上陸の野望を粉砕したといわれる。ホレーシオ・ネルソン提督（1758〜1805）率いるイギリス艦隊は連合艦隊に大勝利したが、ネルソンは狙撃兵の銃弾に倒れ絶命した。なお、ネルソンはその前、コルシカ島で右目の視力を失い、その後カナリア諸島の戦いで右腕を切断し隻眼・隻腕であった。



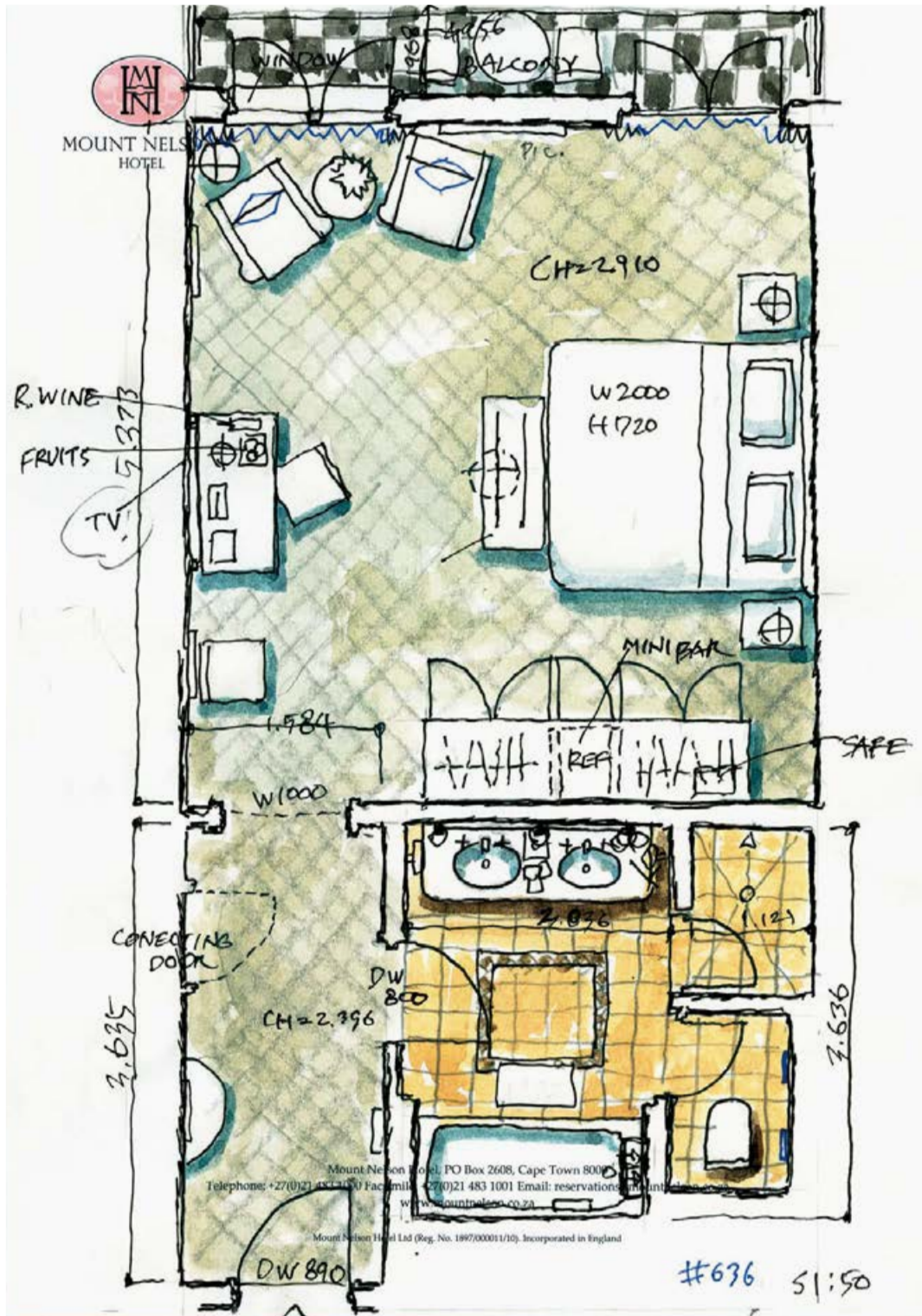
荒々しい喜望峰の先は南極！



ウエルカム・フルーツ。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍・光文社）、『測って描く旅』（彰国社）、『旅はゲストルームII』（光文社）がある。

Text & Sketch by Ura Kazuya



セオリーどおりのプランだが  
各所に優雅さが漂う。

BELMOND MOUNT NELSON HOTEL

Add/76 Orange Street, Gardens,  
Cape Town, 8001 South Africa  
Phone/+27 21 483 1000  
URL/www.mountnelson.co.za



# 幾何学

Yagi House

右手奥には床の間  
はないが、壁に掛  
け軸が下がる。

2

八木邸 設計／藤井厚二

Fujii Koji × Fujimori Terunobu





和でも洋でもなく

1

図面には居間とある麻雀専用の部屋。正面壁には、右手に床（とこ）、左手にソファが組み込まれている。ソファの前には電熱の手あぶり。

# 現代住宅併走

第三十九回

連載

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu  
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後均

(藤井厚二のポートレイトを除く)



3

3/地味な外観。右手に生垣、左手に板塀というおもろい造り。

4

4/玄関も目立たないが、材も細工も最高レベルを駆使。



## 藤

井厚二の代表作は昭和3(1928)年の「聴竹居」(「TOTTO通信」2000年冬号)となるが、その聴竹居がこのたび重要文化財となり、記念の講演に出かけたとき、昭和5(1930)年の「八木邸」の存在を当の八木さんから教えられ、このたび取材した。

建てたのは八木市造。市造は大阪の糸偏(いとへん、繊維産業を指す)の有力者で、当時の世界の綿の主産地だったインドと取り引きし、住まいは大阪近郊の香里園に構え、

大阪と京都のあいだを行ったり来たりしながら暮らしていたという。

夫婦ともに日本離れしたところがあり、家では3頭の馬を飼い、例のイギリス式の乗馬服と帽子に身を固め乗馬を楽しんでいる。

当時の大阪と京都と神戸には、お金と教養とオシヤレ感覚の三拍子揃った実業家がたくさんおり、彼らが建築家の、とりわけ新しい試みに挑む若き建築家のパトロンとなっていた。

八木と藤井をつないだのは、茶の湯で、裏千家に習う茶の友として知り合っている。お金と教養とオシヤレ感覚にすぐれた



離れの茶室(現存せず) 手前の待合

5

当時の関西人士は、3つに加え、もうひとつ、茶の湯を好む例が結構見られる。

初めて全景を目にしたとき、あまりの自己抑制に驚いた。東京で馬3頭を飼うほどの家なら、もっと建物を高くするし、門構えも玄関も立派にするのに、東京風に慣れた目には2階建てが平屋に見えるし、アプローチは郊外のサラリーマンの住まいに毛が生えた程度。

村野藤吾は和風住宅の極意として「門戸を張らず」と言った。大正から昭和にかけての時期、

伝統的造形文化のモダン化をリードした西川一草亭(華道家)も同様であり、藤井は西川に学ぶところが大きかったという。

## ま

ず全体を眺めたとき、気づいたのは、西川流の自己抑制に従う門柱

の左と右に延びる敷地の囲いの違い。ふつうなら垣根か塀のどっちかを選ぶはずなのに、なんと右手は生垣、左手は板塀。生垣はもともと塀は後補かと思っただけ、塀の笠木が銅板の半円状になっているところや板の造



併住現代  
走宅  
Fujii Koji × Fujimori Terunobu

りの丁寧さからして、藤井の手によるにちがいない。敷地の囲いを生垣と板塀に両分する門の中央を通過して玄関に入ると、そう広からぬ玄関の中が左右に両分され、造りと面積からして右手が客用、左手は家族用にちがいない。客用の角柱には土足の着脱が容易なように、腰掛が造り付けられているが、私がちよつぱり藤井を苦手とするのは、こういうあまりなまでの神経の細やかさ。住まいに取り組むと、こういう辺りまで行って初めて達成感があるということか。

## 中

に入ってから平面図を確かめると、向かって右手は接客機能（書斎）も入るが、書斎は明治初期の和洋併置型住宅の頃より接客空間の側）で左手は家族機能と両分されている。日本の住まい方の伝統ともいべきハレ（接客、対外）とケ（家族、対内）の両分を玄関と門にまで貫徹しようとしたところは、住まいに合理主義と機能主義をもち込んで伝統を近代化しようとした藤井ならではの試みといえよう。まずハレを見る。

り越えられ、新しいひとつの空間が誕生しているのがわかる。これぞ、藤井が日本の20世紀建築ならではの「木造モダンイズム」の祖たるところ。木造モダンイズムの誕生にあたり大きな役割を果たした建築的要素のひとつに収納家具があった。伝統では収納家具は室内には置かず、納戸の「長持」や「櫃」に隠してすませていたが、ヨーロッパ建築では家具を運び込んで室内の見せ場とする。藤井はどうしたか。日本の伝統ともヨーロッパとも違い、収納家具を建築の一部として室内に造り付け、それを見せ場とする。収納を室内に加える点はヨーロッパ発だが、造り付けは床の間の伝統を取り込んでいる。源の異なる和洋ふたつを取り込みながらヘンにならなかつたのは、その形をデザインするとき、幾何学をベースにしたおかげだった。幾何学は数学だから和も洋もないし、両者の造形の底に潜む原理でもある。藤井がただ一人というか最初に、伝統とモダンの通底化に成功したのは、和と洋といった文化的差異の奥に幾何学という世界共通の原理を発見したから、と、近年の私は考えている。ハレの場を巡りながら、家具の次に気づいたのは床の間の一

## 6

6 / 階段室。手すりと手すり子に注目。藤井は正方形の次に三角形を好んだ。

7 / 手すり子にも透かし彫り。8 / 書斎。天井には茶室由来の網代（あじろ）が張られる。藤井は茶室を媒介にして伝統とモダンの統一に成功する。

## 8

## 7





現代住宅 併走 Fujii Koji x Fujimori Terunobu

併走 現代住宅 Fujii Koji x Fujimori Terunobu

11 奥の戸棚は斜め。

10 椅子の肘掛に注目。



9 食事室。木材を自由に壁や天井に走らせる手法はフランク・ロイド・ライトに学んでいる。

件。床の間は、中世に書院造が成立した後、日本の住宅の最大の見せ場となり室内に君臨してきたが、これを藤井はどう扱ったか。このテーマが伝統とモダンを通底させるうえの勘所であることは、藤井が『床の間』(田中平安堂)と題する一冊を出していることから明らかだろう。このテーマについての藤井の答えは、床張りの『麻雀の間』(居間)に見て取れる。施主と建築家は茶友に加え雀友でもあり、雀卓はじめいつさいの小物まで建築家はデザインしているが、当然、床の間にも取り組み、正面の壁面に、右手に床の間の飾り棚、左手にソファを組み込んでいる。椅子・テーブルの暮らしにあつてはソファは大事な人の座にほかならない。日本の床の間の系譜のなかには床の畳敷きを貴人の席とする例があり、このあたりのことを考えて、ソファと飾り棚を並べて組み込んだのかもしれない。

ケの機能のほうで注目したのは、調理室と家族用の食事室で、まず調理室の流しの造り。人造石研ぎ出しはいいとして、底面にガラス棒が並んでいるではないか。このような工夫は前にも見つけて茶室の水屋の流しに取り

12 食事室と調理室の間仕切りは、つなぐような切れるような微妙なデザインとなる。

付けられる簀の子張り(丸竹の並び)が元と気づくが、油物の洗いや水の飛散、ガラス棒自体の洗いを思うと、ずいぶんお手伝いさん泣かせの実験だったにちがいない。なお、家族12人に使用人3人がこの家に住んでいた。ガラス棒はここまでやらないくても思ったが、食事室の椅子の工夫には共感した。椅子は肘掛が付いたほうが身体は楽だが、付くと立ち上がって離れるときに邪魔をなす。引けばいいが、少し重いと座った姿勢のまま後ろに引くのは煩わしい。設計者はこの小さな煩わしさを解くために神経の細やかさをどう発揮したんだろう。答えは、肘掛を後半半分だけとする。



こんなことまで観察することができるのは、取り壊した茶室を除いて、建築から家具、調度まで一切適切を八木家のご遺族が保存してこられ、その労の一部を今は地元の八木邸倶楽部が引き継がれているおかげ。若い頃、こうした営みに道を開いたひとりとして、とてもうれしい。

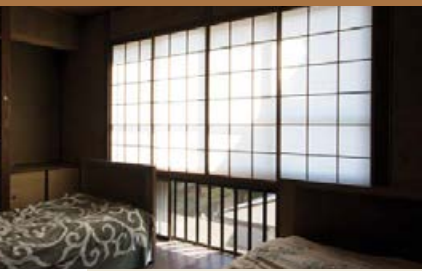


13 調理室。調理室を白く塗るのは衛生のためだが、伝統の台所があまりに暗く湿っていたことへの反省も込められている。14 可動の調理台。15 流しの底面に敷かれた『謎』のガラス棒。

15 14



# 八木邸



2階寝室。通風の窓を開けたところ。

### 建築概要

所在地	大阪府寝屋川市
主要用途	専用住宅
設計	藤井厚二
施工	酒徳金之助(大工棟梁)
敷地面積	1,324㎡
建築面積	253.73㎡
延床面積	376.73㎡
階数	2階
構造	木造
竣工	1930年

## 藤井厚二

ふじい・こうじ/1888年広島県生まれ。1913年東京帝国大学(現東京大学)工学部建築学科卒業。13~19年竹中工務店勤務。19~20年欧米遊学。帰国後、同郷の武田五一の誘いを受け、20年新設の京都帝国大学(現京都大学)建築学科の教師となる。21年助教授。26年教授に就任。建築衛生学を担当。防音、防熱、通風などの科学的研究を実践するため、大山崎の丘陵地1万2,000坪を購入し、自宅を実験住宅として5期にわたって建てる。日本最初の住宅研究者として、住宅建築設計の基礎的資料を確立し、日本の気候・生活・建築材料と西洋的

Fujiwara Kouji



な空間構成とを融合させる手法を提示した。将来を嘱望されながら、38年49歳で逝去。自分のデザインした墓所に眠る。

## 藤森照信

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞。

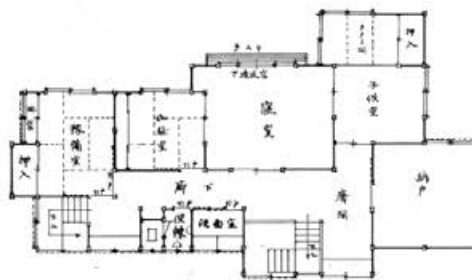


Fujimori Terumitsu

## 平面図

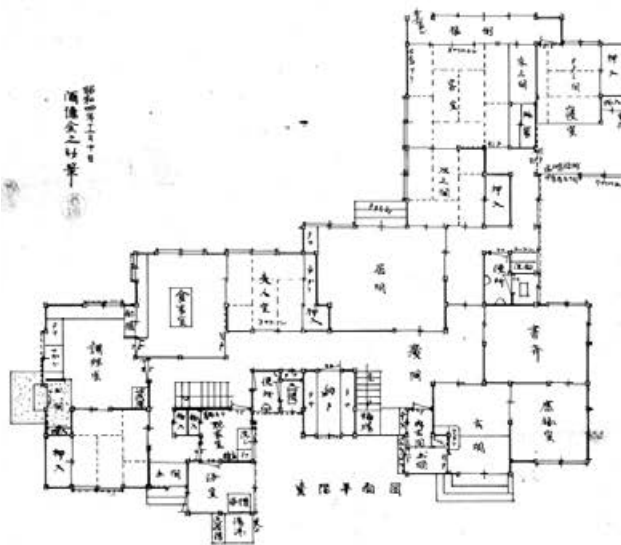
0 2 4m

1/300



2階平面図

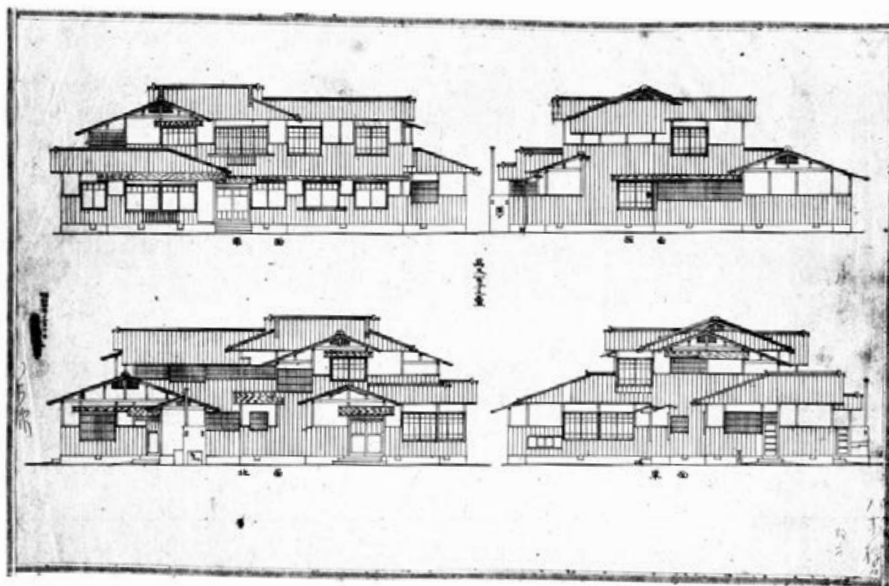
2F



1階平面図

1F

## 立面図



図面提供/酒徳家+京都工芸繊維大学矢ヶ崎研究室

## GINZA SIX

2017年4月、東京・銀座6丁目に「GINZA SIX」がオープンした。松坂屋銀座店の跡地を含む、ふたつの街区約1.4haを一体にした市街地再開発事業によって誕生したもので、街区のあいだにあった区道を敷地の東に移設する一方、建物の1階を通る敷地内通路と、2階を通る歩行者用通路を確保することで、人や車の流れを遮断することなく、延床面積約14万8700㎡という銀座エリア最大規模を誇る複合施設が実現することになった。

地下6階地上13階建ての建物は、241店舗が集う商業施設をはじめ、賃貸オフィス、文化・交流施設「観世能楽堂」、観光バス乗降所、観光案内所、屋上庭園などからなり、非常用発電設備や防災備蓄倉庫も完備。災害時には帰宅困難者受け入れ施設としても機能する。

基本設計と外装デザインは谷口吉生さん率いる谷口建築設計研究所、実施設計は同研究所とKAJI M A D E S I G Nの

JV、商業施設共用部のインテリアデザインはグエナエル・ニコラさん率いるキュリオシティが手がけた。

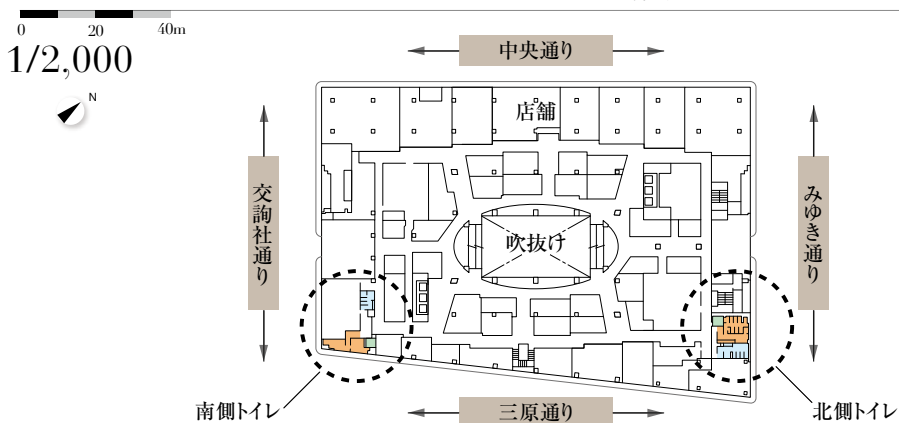
施設の運営は、J・フロントリテイリングの中核企業である大丸松坂屋百貨店、森ビル、Lキャタルトンリアルエステート、住友商事の4社が共同設立した「GINZA SIXリテールマネジメント」が行っている。同社の光田寛和さんによれば、4社のトップはこのプロジェクトの計画から竣工まで、4年間に18回も集まり、重要な案件の決定を自ら行ってきたという。

## 雁行した通路で人の流れをデザイン

商業施設のコンセプトは「Life At Its Best（最高に満たされた暮らし）」。

「単に高級ブランドだからラグジュアリーということではなく、ここに来るといふ体験そのものによって一歩豊かになれるような、より次元が高い真のラグジュアリー」ということではなく、

GINZA SIX 5F フロア全体平面図



中央通りから見た外観。



## 商空間と一緒になったトイレデザイン

ユアアリーを提案することです」と光田さんは言う。

これに対し、ニコラさんが重視したのは、ストーリー性のあつた上質な空間デザイン。中央の吹抜けを囲んで螺旋状に設けた回廊やエスカレーター、雁行させた路地のような通路が印象的だ。キュリオシティの大内田政隆さんは「歩いていくと少しずつ見えていない部分が見えてくる。そうすることで歩く楽しみも出てくるし、じつはテナント側にとっても角を出すと遠くからでも店が見通せるので、双方にメリットがあるんです」と語る。

また、エスカレーターや壁面のデザインなど、館内には右左がりの斜めラインのモチーフが繰り返されているが、これは上階へと客を誘導する仕掛けでもあるという。「お客さまに縦横斜めに回遊しながら、いかにゆつくり過ごしていただくかということに関して、キュリオシティのプレゼンは非常に長けていました」とは光田さんの弁。

## 照明や素材の明暗でトイレまわりを演出

こうした人の動きや空間の流れを重視したデザインは、トイレの設計にも生かされている。3〜6階までは南北2カ所にトイレがあるが、今回取材したのは5階北側、6階北側のトイレと6階南側のベビー休憩室。

5階のトイレでまず目を引くのは、入口手前に設けた休憩コーナーだ。壁面にアートがかけられ、オリジナルの長椅子が置かれている。大内田さんいわく「建築上の制約から、トイレは商空間のバックヤードの通路沿いに配置せざるをえないため、それを逆手に取り、奥まったトイレに行くにつれてテンションが落ちるのではなく、手前の通路もトイレのアプローチととらえ、アートのあるリラククススペースとして演出しました」。照明の照度も、店舗エリアからトイレに近づくにつれて徐々に下げ、さらにトイレ内部も奥のブー

## トイレまでのアプローチ



↑トイレ入口。斜めラインで構成される屏風壁が出迎える。



↑トイレ前の休憩コーナー。アートや照明が動線を演出。



↑2～5階の吹抜け。周囲や天井は斜めラインを基調とした。

## 女子トイレ



↑洗面・パウダーコーナー。斜めの間接照明で高空間と一体となったデザイン。

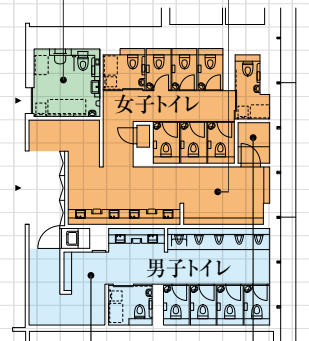


↑上/ブースコーナー。下/パウダーコーナー。奥にはフィッティングルーム。

## 5F 北側トイレ平面図

0 2 4m

多機能トイレ パウダーコーナー



パウダーコーナー

フィッティングルーム

N 1/300

## 男子トイレ



↑小便器コーナー。奥には身だしなみを整えることのできるパウダーコーナー。

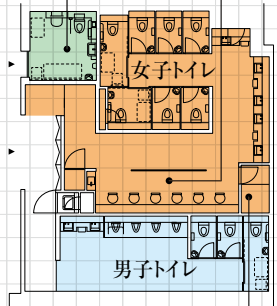


↑男女とも広めのブースに、ベビーベッドを完備。床はフローリングをイメージ。

## 6F 北側トイレ平面図

0 2 4m

多機能トイレ パウダーコーナー



フィッティングルーム

N 1/300

## 女子トイレ



↑座って化粧直しできるパウダーコーナー。右側通路に比べ暗色の床材を使用。

## 多機能トイレ



↑オストメイト対応。多目的シートやベビーカーチェアを完備。

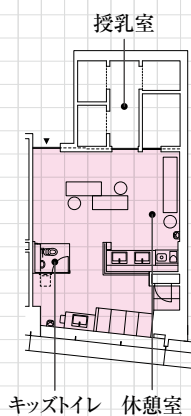
## 男子トイレ



↑動線に配慮して、ブース・小便器・洗面コーナーを配置。

## 6F ベビー休憩室平面図

0 2 4m



キッズトイレ 休憩室

N 1/300

## ベビー休憩室



↑休憩室。子どもから大人まで使えるように、高さの異なる洗面台を設置。



↑キッズトイレ。仕切りは半透明ガラス。手前に子ども用フィッティングボード。



# GINZA SIX

## 建築概要

所在地	東京都中央区銀座6-10-1
事業主	銀座六丁目10地区 市街地再開発組合
運営	GINZA SIX リテールマネジメント
主要用途	物販店舗・飲食店舗・事務所 駐車場・地域冷暖房施設 多目的ホール(能楽堂)
設計	銀座六丁目地区市街地 再開発計画設計共同体 (KAJIMA DESIGN、 谷口建築設計研究所)
商業共用部意匠設計	キュリオシティ
施工	鹿島建設
敷地面積	9,077.49㎡
建築面積	8,921.10㎡
延床面積	148,697.50㎡
階数	地下6階、地上13階、塔屋2階
構造	鉄骨造 (一部鉄骨鉄筋コンクリート造、 鉄筋コンクリート造)
駐車場	515台
工期	2014年4月～2017年1月

## おもなTOTO使用機器

### 5・6階 商業トイレ

●男子トイレ/女子トイレ
壁掛大便器セット UAXC2BP2AN
ウォシュレットPS TCF5503R
マーブライトカウンター ツインデッキ
ポウル一体タイプ MKWB
ハンドドライヤー高速両面タイプ TYC420W
フィッティングボード YKA4I
ベビーチェア YKA15R
ベビーチェア コーナー設置タイプ YKA16R
ベビーシート YKA25R
●男子トイレ
自動洗浄小便器 UFS900R
パブリック用手すり T112CU2
●多機能トイレ
フラットカウンター多機能トイレパック
XPDA0RS3211WWW
収納式多目的シート EWC520BN
●ベビー休憩室
幼児用腰掛式便器 CS300B
幼児用暖房便座 TCF40
幼児用手すり YYB10

に進むほど下げて、間接照明を多用してやわらかな光の演出を心がけたという。

トイレの入口には各階とも、間接照明で斜めのラインが浮かび上がる、屏風のような間仕切り壁を設置。内部は木質系の素材で統一した落ち着いた感じのあるインテリアだ。一見同じ材料を使っているように見えるが、大内田さんによれば、ブース内やパウダーコーナーなど、ゆったり過ぎるスペースは照明同様、明度を下げた色を選んでいそう

ることができ、ヘアアイロンや携帯電話の充電ができるようにコンセントを付け、化粧直しした後、すぐゴミが捨てられるようにゴミ箱も設置してほしいとリクエストしました」と語る。

一方、男子トイレもすべてのブースにベビーチェアを備えているほか、5階北側には鏡とカウンターのあつたり、フィッティングボードを備えた広めのブースもあるなど、なかなかの充実ぶり。富さんによれば、これも若手の男性スタッフの要望をかえしたものだという。

## チームでの議論の積み重ねがこだわりのトイレに

聞けば、大丸松坂屋出身の富さんは会社設立前からほかの3



キュリオシティ  
デザイナー



GINZA SIX  
リテールマネジメント  
サービス企画室



GINZA SIX  
リテールマネジメント  
取締役  
サービス企画室長

大内田政隆

Ouchida Masataka

富さやか

Tomi Sayaka

光田寛和

Mitsuda Hirokazu

社のメンバーとチームを組んでホテルや商業施設のトイレを見てまわったそうで、「スマホの写真フォルダがトイレの写真でいっぱいになるほど研究を重ねました」と笑う。

その成果を生かし、個室の幅、奥行き、荷物置き場の寸法も最低何cm以上はほしいと細かく要望したとのこと。

6階南側のトイレに併設されたベビー休憩室も注目したい。外光が入り、くつろいで長居しなくなりそうなスペースだ。一角には半透明のガラスでほどよく囲ったキッズトイレも備わっている。

このキッズトイレを巡っては、隣接する休憩スペースが飲食可であることから、おいは外に出したくないが、その反面、中の子どもには目が届くようにしたいという相入れない問題があ

り、どこまでガラスにするか、ドアをどこに付けるかなど、4社とキュリオシティのあいだで侃々諤々の議論が重ねられたという。

「みんなでユーザーの立場に立って話していると、だんだん視線が合ってくるんです。トイレは商業施設の苦情の上位に入るといわれますが、ここはオープン以来、クレームがほとんどない。それはわれわれが妥協せず、とことん話し合って決めてきたことの成果だと思います」と光田さん。

決して華美ではないが、子どもからお年寄りまで誰もがホットとできる、ホテルのように上質なトイレ。それもまた、GINZA SIXが目指している「一歩先のラグジュアリー」にちがいない。

今、住宅会社の動きから目が離せない。  
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、  
会社の性格、そして会社をリードする  
人物の性格、マーケティング戦略……。  
これは、その個性的な活動で  
地域に生きる会社のドキュメント。

## 本や勉強会を通じて、納得を得る家づくり

Housing Company

代表取締役  
**松井祐三**さん

マツミハウジング。東京・小平に本社を置き、東京西部を中心に、埼玉、神奈川エリアで家をつくりつづける地域ビルダーである。だがその名前は、一部の地域や建築関係者にとどまらず、広く全国で知られている。仮にマツミの名前を思い出せないくとも、『いい家』が欲しい。』(創業社)という書名にピンとくる人は多いだろう。創業者で、現会長の松井修三さんが執筆したこの本は、朝日新聞の天声人語でも紹介され、熱烈な「マツミ」ファンを多く生み出した。

### 公私混同はしない 一から現場で覚える

改訂新版となっている同書も含めて、現在までマツミハウジングに関して出版された本は4冊。その3冊目となった『だから「いい家」を建てる。』(大和書房)を執筆したのが、現社長の松井祐三さんだ。2007年に修三さんから会社を引き継ぎ、ちょうど10年になる。

松井家の三男となる祐三さんは、小さな頃から父の家づくりを見て育った。それで「自分も



マツミハウジングの書籍。先代の修三さん、祐三さん執筆の3冊と施主の体験談が記された1冊。

Photo by O.I.G.D.C.

建築をやりたい」と思ったわけではないというが、いつの間にか住宅をつくる道へ。勉強する気がなければ大学には行かせず高校卒業後1年間自由時間を与える松井家の教育方針など、祐三さんが建築を始めるまでのいきさつもユニークなのが、詳細は先述の著書に譲る。

建築の世界に入った祐三さんはやがてマツミハウジングに入社。仕事場では親子だと思ってしまう修三さんの意向で、会社では一番の下っ端から。見習いとして数多くの現場を体験し、実務を身体で覚えていった。

### 室内の空気を浄化し アレルギーをなくす家

マツミハウジングが目玉としたのは、気密や断熱がそれほど考えられていなかった90年代初

めから、木造住宅に外断熱工法を採用し、自宅で実験を繰り返すなど試行錯誤を続けたことによる。そしてシロアリ対策も含めた現状での到達点と言えるのが「涼温な家」だ。

涼温な家も外断熱の高気密高断熱仕様だが、一般的になりつつあるほかの高気密高断熱住宅と異なる一番の特徴は、第一種全熱交換型換気装置とセントラダクトを組み合わせた換気システムにある。ここにエアコンを組み込み、床面積60坪程度までなら、機械一式で家中の換気と冷暖房をコントロールする。

マツミハウジングが大切にしている「住み心地」のなかでも、とくに重視するのが室内空気の質。第一種換気の採用により給気を制御し、セントラダクト方式で空気の流れをスムーズにしたこ

とで給気時に空気の「浄化」が可能となった。ほこりや虫、花粉や黄砂など室内に入れたくないものは増える一方だが、これを2段階のフィルターで取り除く。一時騒がれたPM2.5をも除去するというから驚く。花粉症、喘息、アレルギーなどに悩む多くの人たちにとって、原因物質が取り除かれた、安心の室内環境が実現できる。

### 本と勉強会で 信頼を得るところから

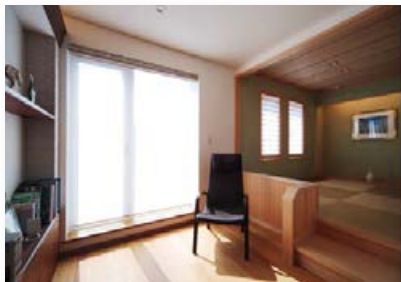
このシステムで特筆すべきは、フィルターの掃除や取り換えを容易にしたこと。第一種換気の難点だったメンテナンスの難しさを解消し、定期的なフィルター交換は住まい手に委ねる。

定期的な訪問した際、きちんとフィルター交換をしているか確認するそうだが、ほとんどの家で問題はないという。それだけ、空気環境にこだわりのある住まい手が多いということだ。

機械一式と書いたが、動力部となる換気機器やエアコンは大手メーカーの市販品であり、機械ごと交換が可能である。製造



1



1/2階フリースペースと和室。椅子座と床座の目線高さに配慮して、和室に段差を設けている。

Housing Company



Matsumi Housing

マツミハウジング(株)
●本社所在地
東京都小平市鈴木町2-221-3
●電話
042(467)4123
●代表取締役
松井祐三
●会社設立
1972年
●従業員数
25人
●事業内容
木造注文住宅の設計・施工、 リフォーム工事の設計・施工
●売上高
20億円(2017年5月期)
●URL
www.matsumi.com
●TOTO使用機器
・浴室
システムバスルーム (シンラHXシリーズ)
・トイレ
ネオレストAHタイプ、 自動洗浄小便器
手洗器セット(ベッセルタイプ)

### Matsui Yuzo

まつい・ゆうぞう/1969年東京都生まれ。先代の三男。都立武蔵高等学校卒業後、カナダの建築専門学校に1年間留学。帰国後、マンション・ホテルなどの意匠設計事務所に勤務。90年にマツミハウジングに入社し、2007年に代表取締役社長に就任。換気や防蟻などで8つの特許を取得している。

2



3



4



2/「住み心地体感ハウス」1階のリビングダイニング。上部は面積12㎡ほどの巨大な吹抜け。中央に社長の松井祐三さん。3/1階トイレと浴室。4/2階トイレには小便器も設置。

中止で部品がないといった、従来の「古くなる」システムとも一線を画す。  
これらは、住まい手のみならず多くのつくり手たちの共感を呼び、マツミハウジングを中心

とした全国33社の工務店が『いい家』をつくる会』を組織。東京から遠く離れた地域でも、システムを採用した住宅が実現できるといふわけだ。  
ローコストを目指しているの

ではないため、やみくもに営業は行わない。定期的に本の広告を新聞に掲載し、興味をもった人に勉強会に参加してもらって、マツミの家づくりについて納得した人から依頼を受けるスタイ

ルを続ける。  
自分たちが信じる家づくりを信頼してくれる人のために。東京発の「住み心地」への探求が、全国各地に「安心」を届けつつ

# en[縁]:アート・オブ・ネクサス

—第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館帰国展

第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2016年5月28日~11月27日)において、日本館の展示「en[縁]:アート・オブ・ネクサス」は、1975年以降生まれの建築家12組に光を当て、困難な時代のなかで建築に取り組む彼らの実践を「人の縁」「モノの縁」「地域の縁」という3つのテーマで鮮やかに提示。日本国内のみならず世界中の人々の共感を獲得し、特別表彰を受賞しました。帰国展では、本展を再構成し、彼らの現在の取り組みも交えて、日本の建築の前線を紹介します。



日本館展示風景(イタリア・ヴェネチア、2016年)

## 日本における en「縁」展に むけて

文／山名善之(建築家、本展監修者)

第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(\*1)の日本館は、モダニズムを通して失ってきた社会のさまざまな「結びつき(アート・オブ・ネクサス)」を、アジア的なコンテクストのなかで価値観をとらえなおす試みであった。「en(縁)」というテーマのもと、12組による建築を、「人の縁」「モノの縁」「地域の縁」といった絡み幅輻輳しあう3章のレイヤーで紹介し、アジアの生活空間の延長線上にある日本の都市空間・室内空間を来場者に想起させることを意図した。また、今日の日本のサブカルチャーとも通じるフェティッシュな展示物を通して、感情移入<sup>レゾナンス</sup>できることを目指していた。

この年のヴェネチア・ビエンナーレ全体のポスター(\*2)に描かれた「ナスカの地上絵」を構成する石は、近くに寄れば一つひとつの個性を見出すことはできるが、そのひとつを取り上げたところで地上絵の全体像を構想することは難しい。

今回の日本館は、複数の石で地上絵を描き出すことを目標に、1975年以降生まれの建築家12組の実践を展示した。それぞれの作品を丁寧に読み込んでいくと、建築家によって見出された社会的課題の「建築」的解法を理解することができる。一つひとつの建築には多くのセンシティブでナイーブなアイデアがあり、今日の日本の現実的な問題から未来を切り開こうという意思を確認することができる。もちろんそれは、決して「大きな市民社会」に向けた強いメッセージを発するものではない。純粹性、抽象性や論理性といった教条主義のモダニズム建築が抱いた「大きなひとつの理想」や社会全体に対する「革命」を企てることを目指しているわけでもない。それぞれの建築には具体的

Next Exhibition  
at  
TOTO  
GALLERY・MA

↓  
来年度の  
企画展に  
ついて

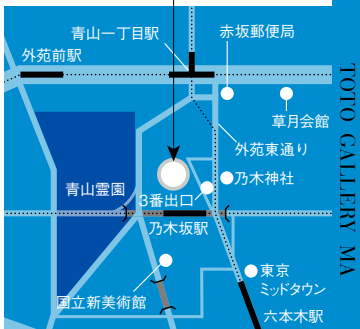
## 2018年度 企画展の ご案内

TOTOギャラリー・間は国内外の建築家やデザイナーの個展にこだわり、さまざまな企画展を開催しています。2018年度の展覧会にも、ぜひご来場ください。

- 平田晃久展  
2018年5月24日(木)～7月15日(日)
  - 藤村龍至展  
2018年7月31日(火)～9月30日(日)
  - 田根 剛展  
2018年10月18日(木)～12月23日(日)
  - RCRアーキテクト展  
2019年1月24日(木)～3月24日(日)
- \*展覧会名および会期は予定のため、変更の可能性があります。  
\*建築家講演会を各1回開催します。  
\*詳細は追って、TOTOギャラリー・間ウェブサイトでご案内いたします。

## TOTO ギャラリー・間

所在地  
東京都港区南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル3F  
電話／03(3402)1010  
ファクス／03(3423)4085  
開館時間／11:00～18:00  
休館日／月曜日・祝日  
入場料／無料  
アクセス  
● 東京メトロ千代田線  
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分  
● 都営地下鉄大江戸線  
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分  
● 東京メトロ日比谷線  
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分  
● 東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線  
「青山一丁目」駅下車  
4番出口徒歩7分



www.toto.co.jp/gallerma/  
61

会期／2018年1月24日(水)～3月18日(日)

本展監修者

山名善之  
Yamana Yoshiyuki



撮影／川辺明伸

やまな・よしゆき／東京理科大学理工学部建築学科教授、フランス政府公認建築家(DPLG)、博士(美術史)。専門は建築史・意匠学、アーカイブズ学。ICOMOS、DOCOMOMOのメンバーとして建築保存(近現代建築)、文化遺産分野で活動。1966年東京都生まれ。90年東京理科大学卒業。香山アトリエ／環境造形研究所、パリ・ベルヴェイル建築学校DPLG課程(フランス政府給費留学生)、パリ大学バンテオン・ソルボンヌ校博士課程修了。アンリ・シリニア・アトリエ(パリ・文化庁在外派遣芸術家研修員)、ナント建築大学契約講師などを経て、2002年より東京理科大学勤務。



©Koichi Tomura

ヨコハマアパートメント

設計／西田司+中川エリカ  
所在地／神奈川県横浜市  
竣工／2009年



©Junpei Suzuki

高岡のゲストハウス

設計／能作アーキテクト  
所在地／富山県  
竣工／2016年



©Yoshino Masuda

馬木キャンプ

設計／ドットアーキテクト  
所在地／香川県小豆島  
竣工／2013年

### 出展作家

- mnm／常山未央
- レビ設計室／中川 純
- 西田司+中川エリカ／西田 司、中川エリカ
- 増田信吾+大坪克巨／増田信吾、大坪克巨
- 成瀬・猪熊建築設計事務所／猪熊 純、成瀬友梨
- 403architecture [dajiba]／彌田 徹、辻 琢磨、橋本健史
- 仲建築設計スタジオ／仲 俊治、宇野悠里
- 青木弘司建築設計事務所／青木弘司
- 能作アーキテクト／能作文徳、能作淳平
- BUS／伊藤 暁、坂東幸輔、須磨一清
- miCo／今村水紀、篠原 勲
- ドットアーキテクト／家成俊勝、赤代武志、土井 亘

### 記念シンポジウム

en[緑]:アート・オブ・ネクサス、その先へ

日程／2018年2月16日(金)  
場所／建築会館ホール  
定員／350名

### ギャラリートーク

“my architecture, after the Venice Biennale”

場所／TOTOギャラリー・間  
定員／各回70名

◎ 事前申し込み制。詳細はTOTOギャラリー・間ウェブサイトをご覧ください。

ひとり女性の広い荒野ではここに登り、周囲を見渡しているビジュアル。ペルーのナスカにおいて、地上から見るとランタタと並んでいると思われていた石がはしに登ることで、じつは鳥や花の絵であることを発見したドイツ人考古学者マリア・ライヒの話に基づき、この展覧会で世界に新しい視点を提示したいという願いが込められている。

## \*2

第15回  
ヴェネチア・ビエンナーレ  
国際建築展ホステア

## \*1

ヴェネチア・ビエンナーレ  
国際建築展

な個別の対象があり、そこには「人々の生活の質を改善するための課題」が丁寧に見出されている。論理的というより、日常的な課題に対して即興的、即物的に応える、「しなやかな」プリコラーージュ的な様相を示している。

TOTOギャラリー・間における帰国展は、ヴェネチアで表現されたアジア的な生活空間を想起させる散らかった状況、密度感、そしてフェティッシュな展示物を残しながら、個々の設計者がヴェネチア・ビエンナーレを経験し、今後の創作活動にどのような指針が見出されたかを加え、困難な状況を超えて生き延びる現在の建築家の最前線での取り組みを提示する。

それぞれの建築が、全体の「地上絵」のなかで、それぞれどのような「石」でありえるのかを、本帰国展において確認していただきたい。

## TOTOの最新情報

TOTO News 3

### 「ラグビーワールドカップ2019™日本大会」のオフィシャルスポンサー契約を締結しました

TOTOは、2019年9月20日～11月2日に日本の12都市で開催される、「ラグビーワールドカップ2019™日本大会」のオフィシャルスポンサー契約を締結しました。ラグビーワールドカップへ協賛するのは初めてのことです。

本大会は、4年に1回、約2カ月をかけて行われる、世界で最も規模が大きく、また最も愛されているスポーツイベントのひとつ。2019年の日本大会は9回目、アジアで初めて行われる大会です。TOTOは、オールジャパンの一員として本大会の成功に貢献します。

ラグビーワールドカップ公式ウェブサイト  
www.rugbyworldcup.com  
TM©Rugby World Cup Limited 2019



TOTO News 4

### 新中期経営計画「TOTO WILL2022」を発表しました

TOTOグループは昨年5月に創立100周年を迎えましたが、時代や社会動向の変化に伴い、次の100年に向けてミッションとTOTOグローバル環境ビジョンを見直し、2018年度から始まる新中期経営計画「TOTO WILL2022」を発表しました。新中期計画の名称には、「世界中にTOTOファンを増やしていく」という意志(WILL)と、「We Innovate Leading Lifestyles」(私たちは、最上のライフスタイルを提案<革新>します)という想いを込めました。新しいミッションのもと、経営とCSRのさらなる一体化を図り、企業価値向上を目指していきます。

TOTO News 1

### 「平成29年度九州地方発明表彰」を3賞同時に受賞しました

「九州地方発明表彰」は、科学技術の向上と産業の発展に多大な功績を上げた発明や意匠を表彰する制度で、TOTOが誇る環境配慮技術で受賞しました。ウォシュレット(\*)に採用している節水水玉吐水技術の特許が「福岡県知事賞」、ボタンを押す力を利用して自ら発電し、

通信に必要な電力をすべて賄うことができる「エコリモコン」の特許が「発明奨励賞」、「エコリモコン」の意匠が「福岡県発明協会会長賞」の3賞です。今後も、お客さまに必要とされる商品の開発に取り組み、生活文化の向上に貢献します。

\*ウォシュレットはTOTOの登録商標です。



2つの賞を受賞した「エコリモコン」

TOTO News 2

### 社会的責任投資指標「Dow Jones Sustainability Indices Asia Pacific」構成銘柄に選定されました

TOTOは、世界的な社会的責任投資(\*1)指標である「Dow Jones Sustainability Indices (DJSI)」の「Asia Pacific」構成銘柄に9年連続選定されました。DJSIは、米国S&Pダウ・ジョーンズ社(\*2)とスイスの社会的責任投資の調査会社ロベコSAM社が提携し開発した株式指標で、「経済」「環境」「社会」の3つの側面から企業を分析し、持続可能性にすぐれた企業が選

定されます。

TOTOは、今後も広く社会や地球環境に貢献する存在でありつづけることを目指して、事業活動を推進していきます。

\*1 社会的責任投資とは、投資を行う際に、従来の財務分析による投資基準に加え、社会・環境・コーポレートガバナンスといった企業の社会的責任や貢献を重視して投資をする方法のこと。

\*2 S&Pダウ・ジョーンズ社：世界的に主要なアメリカの経済新聞「The Wall Street Journal」などを発行する経済ニュース通信社。アメリカの代表的な株価指数「ダウ・ジョーンズ工業株価平均(通称：ダウ平均)」を算出していることで有名。

MEMBER OF  
**Dow Jones Sustainability Indices**  
In Collaboration with RobecoSAM

TOTOからのお知らせページです。  
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただく  
お役に立つ情報を心がけています。  
合わせてご注目ください。

www.toto.co.jp/publishing/

TOTO出版のお知らせ

Book

『地球家族——  
世界30か国の  
ふつうの暮らし』

重版出来!

同封の  
「TOTO通信アンケート」に  
お答えいただいた方  
なかから、  
抽選で10名の方に  
プレゼントいたします。

PRESENT!



本書の  
ご感想をお送り  
ください。



「申し訳ありませんが、家の中の物を全部、家の前に出して写真を撮らせてください」。世界30か国での「中流」家族の持ち物と暮らしをレポート。1994年の発行から20余年、今なお大好評のロングセラーの1冊です。あわせて、本書著者のピーター・メンツェル氏による人気シリーズ『地球の食卓——世界24か国の

家族のごはん』『地球のごはん——世界30か国80人の“いただきます!”』も、ぜひご覧ください。

- 著者/マテリアルワールド・プロジェクト  
(代表:ピーター・メンツェル)
- 定価/1,893円+税
- 体裁/228×300mm、ソフトカバー、176ページ
- 発行日/1994年11月(初版・1刷)、  
2017年7月(22刷)

セラトレーディングのお知らせ

薄いリムと個性的な  
デザインが魅力の洗面器  
「VAL」シリーズに  
新商品が加わりました

セラトレーディングは、スイス・LAUFEN社のVAL(バル)シリーズに、個性的なデザインの洗面器を追加しました。VALシリーズは、LAUFEN社独自の素材、サファイアセラミックが可能にした極限まで薄いリムが特徴。コンスタンチン・グルッチによるデザインで展開しています。今回ご紹介する商品は、四角と丸を合わせたようなアシンメトリーなフォルム。思わず近くに寄って見てしまいたくなるような、知的で遊び心を感じさせるデザインです。水栓はインセットタイプで洗面器の外への水垂れも少なく、清掃性にすぐれています。また、陶器製の目皿で仕上がりの一体感にも配慮。こだわりの水まわり空間におすすめしたい商品です。



VALシリーズ 洗面器 AU12281

希望小売価格 159,000円(税別)

セラトレーディングの「総合カタログ2017」をご請求いただくと、当商品を含む2017年秋発売の新商品を掲載した「2017 NEW ARRIVAL vol.3」を同封してお送りしております。当社ホームページ、またはファクスにてご請求ください。  
www.cera.co.jp FAX:03-3402-7185

Information >>>

『TOTO通信』定期購読をご希望の建築家をご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

Tel / 093 (513) 6234

e-mail / toto\_tsushin@jlink-net.com

\*法人あての送付となります。

Bookshop TOTO  
Bookshop TOTO

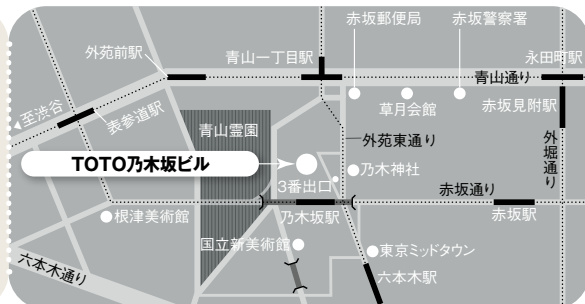
- 所在地/東京都港区  
南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル2階
- 電話/03(3402)1525
- 定休日/日曜日・月曜日・  
祝日・「TOTOギャラリー・間」  
休館中の土曜日・  
夏期休暇・年末年始

TOTO出版  
TOTO Publishing

- 所在地/東京都港区  
南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル2階
- 電話/03(3402)7138
- ファクス/03(3402)7187
- 全国の書店でお求めください。  
直営店Bookshop TOTOでも  
お求めになれます。書店遠隔  
の方はお問い合わせください。

セラトレーディング  
Cera Trading

- 所在地/東京都港区  
南青山1-24-3  
TOTO乃木坂ビル
- 電話/03(3796)6151、  
03(3402)7134  
(東京ショールーム)
- ファクス/03(3402)7185
- 定休日/月曜日・祝日・  
夏期休暇・年末年始



アクセス/●東京外口千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京外口日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京外口銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2018年4月上旬発行の予定です。



## A new technology awakens.

A gentle nuance characterizes the space.  
The product adds enjoyment to the place where it is used daily.

空間に柔らかなニュアンスを与える。  
毎日使う場所にさりげない喜びを添えるプロダクト。



Special site: TOTO water technology <http://www.toto.co.jp/watertech/>  
商品サイト: TOTO new material <http://www.toto.co.jp/products/tnm/>

TOTO技術相談室 0570-01-1010 受付時間: (平日) 9:00~18:00 (土曜日) 9:00~17:00 (日・祝・夏期休暇・年末年始を除く)  
専門家コーナー「COM-ET」 [www.com-et.com](http://www.com-et.com) TOTOホームページ [www.toto.co.jp/](http://www.toto.co.jp/)

※当商品は弊社海外拠点において、水栓金具を含むシリーズで受賞した商品の一部を、国内仕様として発売したものです。



【レッド・ドット・デザイン賞2017 ベスト・オブ・ベスト受賞】  
台付シングル混合水栓 GOシリーズ TLG01305J 84,000円(税別)



※  
【iFデザイン賞2014受賞】  
ベッセル式洗面器 LS703 40,000円(税別)